

# 英語学概論

上利 学 小西 弘信

2018 年

広島文教女子大学

## 目次

はじめに	1
第1章 世界の英語	3
第2章 アジアの英語	11
第3章 英語の歴史	21
第4章 音声学	36
第5章 形態論	43
第6章 統語論	47
第7章 意味論	53
第8章 語用論	58
第9章 談話のしくみ	63
第10章 言語と文化	71
第11章 社会言語学	76
第12章 認知言語学	88
第13章 文体論	94

はじめに

今日、世界の人口、約 64 億のうち約 15 億人が、英語を日常的に使用しているといわれている。この 15 億人が、程度の差こそあれ、何らかの形で英語との付き合いがある。しかし、実際に母語として英語を使用している人口は、約 3 億 8000 万人しかない。母語以外で英語を使用している人口が、母語話者の 5 倍近くいるということになる。

英語はもともと、今から約 1500 年前にヨーロッパ大陸から現在のイギリスのブリテン島に渡来したゲルマン人の言語だった。当時は、それを話す人々の数は非常に限られていた。つまり、5 世紀にゲルマンの戦士たちによってイングランドにもたらされたオリジナルな英語は、当時、話者人口が 15 万人にすぎず、ゲルマン語系の弱小言語だったのである。そのイギリス英語からアメリカ英語、アジア英語、ビジン英語へとさまざまに分化、変容を遂げながら展開してゆき、21 世紀にも、急激に普及している。そして、その普及は、世界に現存する地域を飲みこんで、その地域の言語を死滅させる勢いまでもっているのである。それは、まるで英語が「帝国」のように、世界中の言語と文化を支配し、脅かしているようである。

なぜ、英語は、世界を制覇するほどまでに成り上がっていったのだろうか。ある言語学者は、それは英語を話す人々の持つ力、特に軍事力であると述べ、別の学者は英語がアメリカに根づいたことであると述べている。

さて、ことばが人と他の動物を区別する重要なものであることはよく知られている。ことばは、人の精神を映し出す鏡であるとさえいわれている。ことばの研究を通して「人とは何か」という問題を追及してきたのが言語学だ。

英語学は、言語学の一分野であり、英語という特定の言語を対象とする、言語の科学的研究である。その研究目的は、言語学と同じように、英語という個別の言語を通して、「英語を使用する人とは何か」を考え、究極的には、「人とは何か」を考えてゆくことにある。

上利学  
小西弘信

本書は、以下の章で構成している。

- 第1章 世界の英語
- 第2章 アジアの英語
- 第3章 英語の歴史
- 第4章 音声学
- 第5章 形態論
- 第6章 統語論
- 第7章 意味論
- 第8章 語用論
- 第9章 談話のしくみ
- 第10章 言語と文化
- 第11章 社会言語学
- 第12章 認知言語学
- 第13章 文体論

本書は以下のように執筆を分担した。

上利：第1章～第6章，第11章～第12章

小西：第7章～第10章，第13章

## 第1章 世界の英語

### 1.1 英語の国際化と多様化

“English now is a world language.”(英語は今や世界の言語である)や“English now is the most useful language for international communication.”(英語は今や国際コミュニケーションのための最も有効な言語である)といわれている。(本名 信行 (1998), 1)

そして、英語は、母語、公用語、外国語の3つのレベルで使用されている言語の一つである。というのは、世界193ヶ国のうち、英語を実質的に公用語にしているところは50ヶ国ある。この中には、英語を準公用語や第二公用語としているところも含む。次に英語を外国語とする国は20ヶ国ある。すなわち、英語は70ヶ国(約36%)で大きな役割を果たしている。さらに、その他の国々で、英語を「国際言語」として学習している人数は膨大なものになる。(本名 (2003), 14)

現在の英語はアメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどの英語を母語とする英語圏の人々だけが使用する言語ではなく、非英語圏(日本、韓国などアジア、アフリカ、ヨーロッパなど)も含めた世界中の人々とコミュニケーションを図るための手段として使用する言語といえる。

### 1.2 言語と使用者人口

現代社会において、英語は国際共通語としての地位を獲得している。英語さえわかれば、世界中どこへでも行けるし、生活することができる。数ある言語の中で、母国語(母語)として使用する人数が最も多い言語は中国語で、その次に英語がきている。(中国語8億8500万人、英語4億人、スペイン語3億3200万人、ヒンディ・ウルドゥ語2億2600万人、アラビア語2億人、ポルトガル語1億7500万人)

では、圧倒的に使用する人数が多い中国語が、なぜ世界の共通語になれないのだろうか。それは、使用する国がほぼ一ヶ国にしばられるからである。これは、日本語においても同様のことがいえる。日本語も、使用される地理上の範囲が狭いからである。

他の言語も考えてみよう。スペイン語はスペイン本国では約4000万人の使用人

ロしかいないが、メキシコをはじめとする中米、あるいは、ブラジルを除くほとんどの南米諸国での公用語でもある。つまり、旧スペインの植民地では、スペイン語が根付き、現地人はスペイン語を話すのである。ポルトガル語も同様で、本国では約 1000 万人の使用人口であるが、旧植民地のブラジルの人口は 1 億 3000 万人（1999 年当時）であり、その人口がポルトガル語を使用する。ドイツ語は本国で 8000 万人、スイスの一部、オーストリアなどで 2000 万人が使用する。

フランス語は本国で約 5800 万人、その他ベルギーやカナダの一部、旧植民地コートジボワールなどで 2200 万人ある。イタリア語は本国で 5700 万人、スイスの一部などで 200 万人、合計 6000 万人が使用している。（鈴木寛次，85）

### 1.3 英語が国際共通語になる要因

国際共通語になった言語の経緯を歴史から見てみると、植民地政策と政治的・経済的な優位が挙げられる。

#### (1) 植民地政策

本国以外で使用される言語をもった国には共通の歴史的な事件がある。それは、15 世紀の大航海時代を経て、ヨーロッパの国々が世界中に植民地を作ったという事実である。こうした国々が、植民地政策を行い、現地人に支配国の言語を強制していったのである。英語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語は、この植民地政策の拡大とともに広がった。植民地政策に及ばなかった地域は、そうした運命を辿らずにすみ、言語はほとんど単一国家で、単一言語という状況になった。

#### (2) 政治的・経済的優位

スペインやポルトガルは、16 世紀から 17 世紀まで世界の海を支配し、その権力と富を構築していた。日本でも世界の事情をそれらの国々から来た商人や宣教師から得ていた。しかし、英語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語の中でも、英語が世界に与える影響はかなり著しかった。19 世紀末に絶頂を向かえた大英帝国の植民地支配によるものと、21 世紀の経済大国としてアピールしてきたアメリカの存在であるという歴史上の事実によって、英語の国際共通語としての地位の確立はなされたといえよう。現在、英語が国際共通語として位置づけられているのは、特に、アメリカの存在が大きいといえるだろう。アメリカが、経済のみならず政治、軍事、マスコミ等のあらゆる面で、国際的に世界をリードしてきた国

だからである。

#### 1.4 世界のさまざまな英語と使用者たち

最近では、国際共通語として英語が使われている（と言われている）ことから、日本を含むアジア人の英語やヨーロッパ人の英語など、母語の影響を受けた英語も英語として認める**New Englishes**または**World Englishes**という考え方が広まっている。ここでは、現代英語の実情を明らかにしながら、**New Englishes**の意味と機能、その可能性も、特にアジアと日本の視点から考えてみたい。

先述したように英語の使用者には、英語を母語とする者、英語を第二言語とする者、英語を外国語とする者がいる。

##### (1) 母語使用者の英語

世界の英語の母語使用者の数は、3億7500万人と言われている。概算であるが、その数の内訳は、イギリスで5830万人、アイルランドで350万人、アメリカで2億4000万人、カナダで1900万人、オーストラリアで1600万人、ニュージーランドで360万人、南アフリカで300万人である。

この他にも、リベリア、カリブ諸島、フォークランド諸島、セントヘレナ、トリスタン・ダ・クーニャ、ジブラルタルなどでも母語使用者が多数派を占めている。 (竹下裕子・石川拓, 4) 母語使用者と聞くと、方言や訛りなどなく英語という1つの言語を話していると思いがちである。しかし実際には、彼らの英語には、たくさんの種類が存在する。各国それぞれの英語があり、またその国々の中でも、地域や地方でも英語の違いがある。特に、アメリカ英語とイギリス英語は混同しがちであるが、発音・文法・語法に違いがあると言われる。

##### (2) イギリス英語とアメリカ英語における語彙に関する違い

英・米で同一物の呼称の違い (ヴァネッサ・ハーディ, 49) では、イギリス英語とアメリカ英語の対比として、**lift**と**elevator**, **biscuit**と**cookie**, **shop**と**store**, **underground**と**subway**の例がある。イギリス及びアメリカで違う意味に使われている語彙では、**corn**に関して、イギリス英語では「人間が食べられる穀物一般」であるが、アメリカ英語では「トウモロコシ」である。イギリス及びアメリカでの綴りの違いでは (大石五雄, 51 - 55), イギリス英語とアメリカ英語の対比として、**colour**と**color**, **analyse**と**analyze**, **center**と**centre**の例がある。

このように、イギリスがアメリカに植民地を作り、アメリカが独立して 300 年の間にかなり語彙レベルにおいての違いが生まれている。イギリス人とアメリカ人とがコミュニケーションにおいて誤解が生じることも考えられることであり、両国人がそれぞれの英語を上位に考えていることもある。ここまでいくと、両国が英語に対して感情論にもなりかねない。

### (3) 英語を第二言語とする者の英語

母語使用者の英語は ENL (English as a Native Language) と呼ばれ、英語を公用語または第二言語として使う国々の英語は ESL (English as a Second Language) と呼ばれる。その内訳は、アジアでは、インド、パキスタン、バングラデッシュ、マレーシア、フィリピン、シンガポール、アフリカではタンザニア、ザンビア、ガーナ、ナイジェリア、ケニアがある。

ESL の国では、行政、司法、科学技術、教育、ビジネス、出版、報道などの分野で英語が使われ、個人の生活レベルでは、国語や地域語など、英語以外の言語が使われることが多い。また、他国の人々と英語を用いてコミュニケーションを図る場合が **Inter-national Communication** であるならば、ESL の国内における英語によるコミュニケーションは **Intra-national Communication** である。(竹下・石川、7)

英語を母語としない国々が、英語を使用せざるをえない状況に至った経緯は実にさまざまであるが、先述したように、植民地政策と深い関係にあるのは確かである。

例えば、インドでは、現在の公用語はヒンディー語と英語となっている。植民地以前のインドでは、大小様々な王国が存在していた。イギリスによる植民地支配がなければ、異なった宗教や人種・文化、身分差別(カースト制度)のなかで生きているインドの国民は、意志疎通をすることが非常に難しい状況のままであっただろう。

しかし、インドでも実際に英語を使用しているのは、教育レベルの高い一部の人々にとどまっている。英語を母語とする人数が少ないのにも関わらず、英語がインドにおいて影響力があるのは、英語を教育の言語として使用され、英語を話す人々が国をリードしている現状があるからである。



#### (4) 英語を外国語とする者

国際コミュニケーションの手段として用いられている英語を EIL (English as an International Language) と呼ぶ。これまで、この種類の英語は EFL (English as a foreign Language) と呼ばれていたが、使用者の実態により忠実な表現として修正された呼称が EIL である。

ESL の国と異なって、言語政策上、EIL の国では、英語に公用語としての地位を与えてはいない。しかし、実際には EIL の国の多くの政府は、英語が国民にとって重要な言語であることを認め、英語学習の改善と充実を試み、英語が母語使用者だけでなく、さまざまな非母語使用者とのコミュニケーションの手段としても活用できることをめざしている。(竹下・石川、6)

例えば、日本では、文部科学省が過去に示した学習指導要領では、2002年に「英語が使える日本人の育成のための戦略構想——英語力・国語力増進プラン」を、翌年の2003年には、『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』を、2009年には「英語が使える日本人」を目指し、学習指導要領を改訂してきた。実際に『英語が使える日本人』を目指すことが施行されたのは2011年からである。このように日本の英語教育は、国際共通語である英語を通して「聞くこと」・「話すこと」・「読むこと」・「書くこと」のコミュニケーション能力を養うことが、日本がグローバル社会のなかで生きていくために、重要であると考えた。

2009年に改訂された学習指導要領(英語教育の目標)の内容を見てみると、小・中・高と通じて「言語」と「文化に対する理解」が記されていることから、国際共通語としての英語が使える日本人の育成というよりは、往來の国際理解・異文化理解という枠内にとどまっている状態であるといえるだろう。

コミュニケーションを中心とした英語教育へと方向転換してから、ずいぶんと時間が経過しているのにも関わらず、なかなか成果が出ていない。そのために、2020年から小学校では、3・4年生で外国語活動が、5・6年生で外国語科が始まるまでに至った。しかし、実際に国際共通語である英語を使い、自らの意見を外に向けて発信できる人材を育成しようとするならば、「国際共通語としての英語」を目指した教育に切り替えなければいけないのではないだろうか。

EFLの国では、このような現状が起きており、社会がグローバル化しても、その国民がコミュニケーションの手段としての英語が十分に使用できないことは、

現在も解決されていない課題となっている。

### 1.5 さまざまな英語によるコミュニケーションの障害

英語によるコミュニケーションの多様化は、ESLとEILのジャンルに属する人々による英語活動がENLの人々のそれに加わったことによるものである。何を目的として、誰が英語を勉強し、誰が英語によるコミュニケーションを実践しているのかという問いに対する答えは、それぞれの国の政治的、経済的、教育的、そして心理的な事情などにより異なる。

英語の国際化と多様化は、その使用者の多様化と複雑化をもたらした。ネイティブスピーカーと非ネイティブスピーカー、同じ国に生きる、異なった地域語を母語とする者同士、そして英語を学校でコミュニケーションの言語で学んだ非ネイティブスピーカー同士が、日々、さまざまな状況において英語によるコミュニケーションを図っている。(竹下・石川, 10)しかし、英語の違いだけ以外にも、コミュニケーションが円滑に行えない場合が起きる。以下の例は、返還前の香港の警察署でイギリス人巡査部長の部屋を中国人巡査が訪問する際の会話である。

英: Yes? 「用件は何だ」

中: My mother is not very well, sir. 「母の具合が悪くて…」

英: Yes? 「ほう、それで？」

中: She has to go into hospital, sir. 「入院しなければならないんですが」

英: So? 「それで？」

中: On Thursday, sir. 「次の木曜日なんですけれども」

英: What is it that you want? 「結局、言いたいことは何なんだ」

中: Nothing, sir. It's all right. 「あ、いや、何でもありません。気にしないでください」

さて、このコミュニケーションは成功したといえるのだろうか。中国人巡査が意図したことをイギリス人巡査部長がまったく理解していなかったわけではない。用件の伝え方がどちらも自身の国の習慣に基づいて思考し、発言したために円滑なコミュニケーションが妨げられてしまったのである。

英語の国際化と多様化によって、さまざまな場所で行われる異文化コミュニケーションを成功させるために、言語以外の非英語話者の思考や習慣についても考

えなければならない問題の一例である。

#### 1.6 グローバル時代の英語の姿

インターネットの時代の到来とそれによって英語がどのように変化してきたか。グローバル時代の国際共通語は英語であることは、今や誰もが認めるところであるが、最近の日本では、加熱状態の英語志向がある一方で、英語なんて必要ない、と冷やかな無関心層もいる。英語が国際共通語として機能しているのは事実だ、などという言説を安易に振りまくことこそが英語支配につながるのだ、という意見もある。(鳥飼玖美子, 76)

英語が世界で通用する言語として定着しつつある状況、そのために英語が話せると有利であるという事実、だからこそ世界は英語支配を甘んじて受け入れているという懸念、そうはいつでも日本で生活している限り英語が話せなくても生きていけるという実態はある。自身が属する機関や置かれている状況がそれぞれ異なるために、それによって英語に対する捉え方が変わってくるのは当然のことではあるが、どれも現実起こっていることである。

#### 1.7 国際共通語の実態

まず、英語は本当にグローバル社会（世界）の共通語なのかという点である。そんなことは当たり前だと思える人は多くいるだろう。海外へ旅行に行つて来た人たちからは、完璧には話せなくても片言の英語で充分通じたという話しを聞く。スポーツ選手にとって海外で行う試合は仕事の一部であるため、必要に迫られて英語を勉強しているという話もある。日本のビジネス界でも同様なことが起こっているのが現状だ。日本企業が、「将来のグローバル展開」を視野に社内公用語を決めたのも、英語が国際共通語だからである。(鳥飼, 78)

グローバル時代とは、国と国が同化し合い、無個性になっていくことではなく、むしろ自国の文化を明確に意識し、自国の個性を保ちながら他国の文化に対してもこれを認め、尊敬し、できれば享受していこうという世界のことでないだろうか。個性的な国と国が、お互いの違い、異文化を認めながら仲良くなっていく過程がグローバル化ではないかということである。外国語を学習するにあたって、自国語をないがしろにするのは本末転倒である。自分が育った社会の過去を知っ

たり探ったりしながら自国の文化を理解していくことが、他国を理解していく大前提であり基礎となる。そのための教育には学校が必要だが、家庭や地域社会が呼応する「社会全体としての教育」、言い換えると「学ぶことが生き甲斐となる社会」が必要である。(中村賢一, 46)

本章では、国際共通語としての英語の現状について、英語は世界においてどのような場で、どのような人に、どのように使用されているのかを述べてきた。歴史的に言えば、政治的・経済的に優位な立場であったイギリスとアメリカの使用言語が英語であり、その言語で支配または世界を牽引してきたことが、英語の国際共通語としての位置づけに大きく影響し、英語の現在の地位を構築できたのである。その結果、今や英語は母語使用者だけのものではなく、それぞれの国の母語の影響を受けたノンネイティブ・スピーカーが誕生し、New Englishes と呼ばれるように、それぞれの国で独自の発展をしていったのである。英語が、どのような姿で発展しようとも、グローバル化した世界においては、あるべき姿ではなく、あるがままの姿をいかに受容していくことが、各々の国において、英語を考えていく課題ではないだろうか。

#### 【参考文献】

- 大石五雄 (1995). 『英語と米語 その違いを読み解く』, 丸善.
- クリスタル, デイヴィッド (豊田昌倫訳) (1989). 『英語一きのう・今日・あす』, 紀伊國屋書店.
- 鈴木寛次 (2003). 『異文化間コミュニケーションの技術』, 講談社.
- 竹下裕子・石川卓 (2008). 『世界は英語をどう使っているか』, 新曜社.
- 鳥飼玖美子 (2011). 『国際共通語としての英語』, 講談社.
- 中村賢一 (2004). 『グローバル化の中の英語』, (『神戸英語教育学会紀要』第 19 号).
- ハーディ, ヴァネッサ (1996). 『英語の世界・米語の世界 その歴史・文化・表現』, 講談社.
- 本名信行 (1998). 『アジアの英語』, くろしお出版.
- 本名信行 (2003). 『世界の英語を歩く』, 集英社.

## 第2章 アジアの英語

### 2.1 アジアの言語の現状

#### (1) アジアの言語の種類

アジアにはどれくらいどの言語があるのだろうか。一説には、さまざまな語族に属す約 2000 の言語が存在するという。これらの言語にはアジア大陸だけに分布するものと、他の大陸でも使用されるものがある。

#### ① アジア大陸のみに分布する言語

- ・トルコ語、モンゴル語、満州語を含むフルタイ語族。
- ・インド南部とスリランカに分布し、タミール語やマラヤーラム語を含むドラヴィダ語族。
- ・中国語、ビルマ語、チベット語などを含むオーストロアジア語族。(オーストロネシア語族やタイ語と関連づけてより大きなオーストリック語族とする説もある)
- ・他にもチュクチ語、カムチャダール語があるが、ほとんど消滅している。

#### ② アジア大陸以外にも分布する言語

- ・アラブ語と並び、アフリカとの関連性を示すアフロ・アジア語族。
- ・ファルシー語、クルド語、ヒンディー語、ベンガル語、ウルドゥ語、パシュト語、ネパール語などを含み、ウラル語族—オセツト語、マンシ語、ハンティ語—とともにヨーロッパと言語的関連性を示す、インド・ヨーロッパ語族。
- ・アジアとアフリカをつなぐエスキモー・アリュート語族—ユピック。
- ・インドネシア語、マレー語、タカログ語、ジャワ語などその他の言語を含む、アジアとオセアニアに広がるオーストロネシア語族。

#### ③ 一定の語族に分類できる言語でないもの

- ・日本語、朝鮮語、アイヌ語、ブルジャスキー語など、はっきりとした親族関係が見つかっていない言語も存在する。

このように言語数と話者数に関して、アジア大陸はかなりの多様性を示している。シベリアに存在するいくつかの言語のように、現在の話し手が最後という言葉から、中国語やヒンディー語のように話者数が世界で最も多い言語まである。また、話者数の上位 5 言語のうち 3 つは中国語、ヒンディー語、アラビア語といったアジアの言語であることも、注目される。

## (2) アジアの言語の地位

言語の地位については、アジアでは大多数の公用語が、その土地固有の言語である。そのため、地方言語の多くが他の地方言語に圧迫されており、植民地本国の言語に押されがちな他の大陸とは異なった様相を示している。とはいえ、英語やフランス語が公用語の国も存在する。英語はインド、パキスタン、シンガポールの公用語である。フランス語はカンボジアやベトナムなどで確認されている。

## (3) 他言語に入ったアジアの言語

アジアの言語からは、たくさんの語彙が世界の他の言語にもたらされた。英語で使われているタイフーン、ティは中国語。ジャングル、シャンプーはヒンドゥ語。マンゴーはタミール語。フランス語やスペイン語でランチボートを意味するランチャ、英語やスペイン語でゴレンシを意味するカランポーラはマレー語。カキ、ボンサイは日本語。英語やフランス語などでほうれん草を意味するスピナック、フランス語などでカップを意味するタサはペルシャ語。同じように靴を意味するサバタ、キオスクはトルコ語。ラマはチベット語。パンダはネパール語。マンモスはオセット語など多数存在するのである。

## 2.2 アジアに英語が入ってきた経緯

英語が母語使用者から独立し、世界の各地で非母語使用者の口のにぼるようになると、今までになかったいろいろな機能と構造を獲得するようになる。つまり、英語を母語としない人々が第二言語、あるいは外国語として使う非母語使用者の英語の誕生である。

英語を公用語として採用している多くの国々は英米の植民地であったことから、英語使用が社会制度の中に深く組み込まれていった。しかし、その英語は母語使用者の標準英語とはやや違った発展をとげた。そして、各地の非母語使用者は独自の変種に誇りを持ち、さまざまな分野で広く運用するようになっていく。各地では、当然のことながら、ある程度独自の言語と文化にあった英語を使うことになる。その結果、英語にいろいろな差異が生まれる。その差異が拡大すれば、変種どうしの理解が困難になる可能性はある。

また、その国々は新しい社会環境の中で使用するために、母語使用者・イングリッシュを創造している。それは国内の文化に裏打ちされたものになる。それは、

アイデンティティを表明する手段でもあるから、英米人との違いを示すいろいろな工夫が重ねられ、それと同時に、英語が国際的な機能を持つことを理解しているので、英語を破壊するようなことはない。非母語使用者英語が母語使用者の英語と違うとしても、それはあくまでも英語そのものである。(本名、5 - 11)

## 2.3 アジアの英語の成立と現状

### (1) 歴史

アジアの国々にとって、英語は英米の文化社会に同化する手段ではなく、自国の統合と発展をはかる手段であり、世界に自己のアイデンティティを主張する道具である。このために、各民族はある程度自分の文化に合った英語を使うことになる。その結果、アジアの英語にいろいろな差異が生まれることになった。

アジアの国々の独立の当初は、英語を使うと旧宗主国であるイギリスの文化を引き継ぐことになり、独自の国民性を育成できないのではないかと人々は危惧していた。しかし、彼らは、自国に合った独自の英語を形成することによって、この問題を解決できることに気がついた。それは、現地の言語と文化の影響を受けた英語であった。

### (2) 英語の役割

英語が国の独立を促していく働きができるようになった理由には、2つの英語の変化がある。

#### ① 英語の国際化

英語の国際化により、英語は英米人とだけ話す言葉ではもはやなくなった。英語は母語使用者の英米人に加えて、フランス人ともイタリア人とも、中国人とも韓国人とも、アラブ人ともトルコ人とも、アフリカの人とも南米の人とも交流するのに便利な言語となったのである。このように英語が国際的なコミュニケーションの道具となったということは、多国間のコミュニケーションの言語の地位を得たことを意味する。事実、世界中で、英語使用者は約20億人にも及ぶといわれる。英語を母語とするかしないかは別として、世界で5人に2人が、程度の差こそあれ、英語を使用することになる。

#### ② 英語の多様化

英語が世界で最も広範囲に使われ、国際共通語となったからといって、英米人

などの母語使用者の英語が、そのままの形で世界中に広まっているということではない。まして、みんながまったく同じような英語を話しているというわけではない。事実、世界中で話されている英語ほど、多様な言語はないといえる。英語を母語とするアメリカ人・イギリス人・カナダ人・オーストラリア人でさえ、みなそれぞれ独特の英語を話しているように、英語を母語としないアジア人、アフリカ人、ヨーロッパ人もそれぞれ特徴のある英語を使っているのである。

そこで、英語が国際化したということは、英語が多様化したことも示すのである。なかでも、かつて英米の植民地であった第三世界の人々が英語を「第二言語」として使いながら、それぞれの歴史的・社会的・文化的必然性にあわせて、独特の“New Englishes”を創造している。

### (3) アジアの英語の現状

一般に、英語を母語としない人々は英米の文化を学習するために、そして母語使用者と同じように流暢に話すために、英語を学習しているわけではない。むしろ、自分が属している民族、文化を意識し、自分を国際的な場面で表現する道具として、英語を使っているのである。

たしかに、英語が母語使用者の枠を超えて、非母語使用者を含む多くの人々の異文化コミュニケーションの手段になったということは、英語を英米文化から切り離して運用することが可能であることを示すといえる。これは英語に新しい役割を与えることとなる。すなわち、英語を学習するからといって、母語使用者の行動規範に同化することにはならない。英語は英米文化を模倣する手段ではなく、世界の人々を相手に自分の思うこと、感じること、すなわち自己のアイデンティティ実現する道具となるのである。

シンガポール人はシンガポール人らしいシンガポール英語、インド人はインド人らしいインド英語、フィリピン人はフィリピン人らしいフィリピン英語を話すことになる。それぞれには、発音や文法・語彙に多少の（場合によってはかなりの）特徴がある。英語にいろいろな差異が生まれてくるのは当然である。

そうした状況では、話者間でお互い通じないではないか、という疑問が生じる。しかし、詳細にみると、これらの変種の精神で交流を続けられれば、お互いに理解できるようになるはずである。英語の多様化は国際化の代償である。人間の多様性を適切に評価し、相互理解を可能にする媒体を創造することにつなげなければな



らない。(本名信行, 1-5)

## 2.4 公用語としての英語

アジアの英語を公用語もしくは外国語として採用している国の状況を踏まえて、英語使用状況と国民に課される英語教育について考える。

まず、アジアの中で英語を公用語、または憲法では規定されていないものの事実上英語が公用語の機能を果たしている国の言語事情、そして英語の使用状況を見る。独立後、国内の民族間または宗教上の対立、あるいは自国語で学校教育を行うことができないなどの理由で英語を公用語とし、公用語でないものの、学校教育や公の場で英語を使用しているなど、負の遺産である英語を現在では上手に活用している姿がある。しかしながら、自国語を十分に発達させることができないなどの問題点も残る。(祖慶壽子, 51)

公用語として英語を採用している国々の中から、シンガポール、マレーシア、フィリピンを例に挙げて考える。

### (1) シンガポール

1965年の独立以来シンガポール政府は、マレー語・中国語・タミール語・英語を公用語として定めている。マレー語・華語・タミール語は、シンガポールの民族・文化を代表する言語であり、そのなかでもマレー語は国語として定められている。英語は、シンガポールの植民地時代の背景と国際共通語としての機能・役割を考慮して選ばれたものである。

特に英語が選ばれたことにはいくつか理由がある。一つは、英語が国際共通語として最も優勢だからである。もう一つの理由は、多民族・多文化・多言語国家の統一に必要な民族的偏りのない中立的言語として最適であると、シンガポールの指導者たちが判断したからに他ならない。多文化社会であるシンガポール国内共通語としての英語について、以下項目別にまとめたものである。

#### ① 世界市場の言語

実用性と必要性から英語が言語として選択された。それは国家の生き残りのためであり、シンガポールが以下のような要因を抱えているからである。

- ・国家の広さ：226平方マイル(淡路島ほど)しかなく、ほとんど天然資源がない。
- ・国の地理的環境：マレー社会における中国人の人口が圧倒的に多い。

- ・国内の人種的、宗教的、政治的極端さがある。
- ・地域的、世界的な経済の熾烈な競争がある。

このようなことに対処するためには国際的に通用する英語を使用することが必要である。

## ② シンガポールにおける民族的中立言語

英語は、マレー語や中国語、インドの言語など、他のどの言語にも属さない。この中立性が、すべての人に平等な機会を与え、民族間の調和と国家の統合を促進する。

## ③ シンガポールの建国における役割

英語は、その話者を民族の代表ではなく、シンガポール人としてのアイデンティティを与えてくれるものとしての役割を果たす。また、シンガポールは他民族多文化性に国家建設の理念があったのでないかとの疑問には、英語がこの多民族多文化性の融合やモザイク化を進めるのだと説明がなされている。

以上挙げたように、英語教育の充実は重要な政策となり、1980年の初めには初等教育と中等教育において新しいカリキュラムが導入され、英語は第一言語としてますます強調された。1980年代の後半になるとその成果が見られるようになり、家庭で英語を話す人は、人口の11.6%（1990年）に上昇した。（祖慶，68-69）現在では、この当時の数値よりも多くのシンガポール人が英語を話しているだろう。

### (2) マレーシア

マレーシアは植民地時代に英語が広く使用されていた。しかし、独立した当時、マレーシア内の多様な民族間の対立がある中、過半数を占めるマレー人優遇政策を推進するためマレー語を国語（マレーシア語と呼ばれる）とし、教育言語もマレーシア語にしていたため、英語の使用及び国民の英語力が低下した。そのため、英語力を高めるためのさまざまな政策をとっている。

英語は第二言語として学校教育で教えているものの、プミボトラ政策が進むにつれてマレーシア語の勢いが圧倒的に強いため、英語はクアラルンプールなどの大都市に行かない限り好んで使われていないのが現状である。だが、現在マレーシアでは英語は第二主要言語とされ、決して「外国語」ではないという。憲法もちろん国語であるマレーシア語で書かれているし、政治は全てマレーシア語で執り行われている。税関の書類をはじめ、公的書類も全てマレーシア語で書かれて

いる。しかし、ビジネスや医学などの専門職となると、マレーシア語よりも英語の方が使用されている。これはやはり、マレーシアがゴムやスズなどの輸出にその経済を頼っているところが大きく、外国との均衡の機会が多いためである。

また、クアラルンプールやジャホール・バルのような都市は、外国人が多く働いているため、共通語として英語が使われているのである。マレー系が経営している会社でも、規模の大きいところではマレーシア語よりも英語の方が使用されている。また、テレビ・ラジオ・新聞などメディアも英語とマレーシア語の両方が使用されている。(祖慶, 73 - 74)

### (3) フィリピン

フィリピンは日本の4分の3強の広さの多言語社会である。その言語の数は、孤島やジャングルに住む少数民族の言語を合わせると、100以上と言われている。言語構成は、全人口約6056万人のうち、タガログ語約30%・セブナノ語約24%・イロカノ語約10%・ヒリガイ非語約9%・ピコール語約6%・ワライ語約4%・パンパング語約3%・以下1%台が4言語となり、あと1%未満の言語が続く。地方語も多いことに加え、歴史的経緯からフィリピンは英語が事実上、公用語の役割を果たしている。(祖慶, 76)

アメリカの統治時代は、英語とスペイン語が公用語であった。1973年の憲法では、公用語はピリピノ(フィリピン語とほぼ同じ)・英語・スペイン語となり、1987年の憲法制定の時には、国語はフィリピン語であり、公用語としてフィリピン語と英語を用いると定められた。英語は憲法では公用語の1つであるが、実質的には唯一の公用語として現在も機能していると言って良いだろう。

### 英語の使用状況

	使用場面・分野	新聞・書籍
英語 (公的場面)	立法・行政・教育・マスコミ 国会での演説・公文書	高級紙 学術書
国語・地方語 (私的場面)	家族の団欒・友人との語らい マーケットでの買い物	地方紙 娯楽小説・コミック

英語の話せる労働力が豊富にあることは、外資系企業にとって大きな魅力になっている。海外への出稼ぎが盛んであり、海外で働く人の送金額がフィリピンの年間の国家予算と同じくらいである。新聞の求人欄には、高い英語力を求む、と書いてあることが多い。英語教育の充実している有名私立学校へ、初等教育の時期から通えるだけの資産を持った階層の子どもたちだけが、英語力を身につけて社会の上層部に到達できる。英語の教科書はフィリピン教師が、フィリピン人の執筆した教科書で教えているので、フィリピン英語が教えられていることになり、フィリピン英語の語彙がかなり現れる。英語はフィリピン人同士のコミュニケーションのためという執筆者の意図がはつきり読みとれる。(祖慶, 81)

## 2.5 外国語としての英語

次に、英語を母語や公用語として使用せず、外国語として使用している国を取り上げる。日本もちろんこの中に入っている。同じく外国語として英語を使用しているとはいっても、シンガポール、マレーシア、フィリピンのようなアセアン諸国のように多言語国家、日本や韓国のように1つの言語、民族が国民のほとんどを占める国とでは、やはり状況が異なっている。日本のこれからを考えるためにも、他国の言語事情を知っておくことが必要であろう。(祖慶, 85) 英語を外国語として採択している韓国、中国、日本を例に挙げ考える。

### (1) 韓国

韓国は日本同様、教科として英語を学んでいる。そして日本同様、いやそれ以上に受験戦争が過酷で、受験勉強の中での英語の占める位置は大きい。数年前に日本で話題になった、英語公用語論であるが、韓国からの飛び火であった。それだけ、日本と韓国は状況が類似している。しかし、最近の韓国では英語教育に関しては、日本以上に真剣に取り組んでいるようだ。

現在、英語は外国語として位置づけられているが、過去に短期間ではあるものの全国レベルで英語が公用語にされた時期がある。アメリカ軍政期(1945-1948)の総司令官マッカーサーによる布告第5条では「軍政期間において、英語をあらゆる目的に使用する公用語とする」と定められていた。また、この時期に国定・検定教科書なども導入された。朝鮮半島における教育創設期でのこの3年間の軍政期間とそれ以降のアメリカの介入が、現在に通ずる韓国の英語政策に与えた影

響は大きいといえる。(祖慶, 103)

近年の初等学校(日本の小学校に相当する)への英語教育導入は、一般庶民に直接・間接のインパクトを与えている。先述したように、現在の韓国は際立った学歴社会であり、地獄のような受験戦争が行われている。そんな中で親たちが子どもの教育にことの他熱心になるのも無理はない。当然のことながら、英語教育にも無関心ではいられないはずもない。

このような国内状況が、これまで中学生以上を対象としてきた英語教育市場に変化をもたらした。小学生さらには幼稚園児までも対象としたものへと拡大しつつあるのである。学習雑誌・英語学院・個人あるいは英語村のような集団の「課外(家庭教師)」なども急成長している。また、英語圏の移民も急増していると言われる。韓国政府は英語教育を強化する半面、英語圏文化の流入には神経をとがらせている。これは、日本の英語文化に対する、時に無節操とも思える開放性と一面の対照をなしている。(祖慶, 105 - 106)

## (2) 中国

中国は長い歴史の中で他の国の言語に影響を与えたことはあっても、自らが他国の言語を学んだ経験はほとんどないといっているであろう。それほど、西洋と出会う前は自他共にそれを認めていた。西洋との出会いにより英語に触れるようになったが多くの人々が外国語を学習するようになったのは最近である。第二次大戦後、政治的にソ連と親密であったためロシア語が優先され、その後英語を学ぶようになった。そのことが現在でも日本と同様に英語を話せる人口が少ない原因になっている。(祖慶, 98)

しかし、英語に対して関心を持つ人の割合が多いことも事実である。これは、「中国の、他国から学ぶ能力の総体向上のために、すべての教養ある人に少なくとも一つの外国語が読めるようにする」という政府の目標に促されてのことである。実際にラジオ、各種の映画、ドキュメンタリーなども英語で放送されており、例えば、「テレビ大学」が一般大衆に開放されていることから、第2チャンネルと第6チャンネルでは、毎日英語学習番組を放送している。ラジオ放送に限っては海外向けラジオ放送のみであるが、その放送は一般の中国人も聴くことができ、多くの人々が英語能力を伸ばす良い機会ととらえ、聴取している。地方局では、1回30分の英語番組を1日3回まで放送している。中央人民广播电台では“English on

Sunday”という番組を放送しており、英語圏の文化・歴史・文学を学ぶ手段となっている。

さらに中国における英語の種類を見てみると、最も普通の学習モデルは、革命前も最近もイギリス英語である。その理由は、イギリスが永きにわたって中華人民共和国を承認してきたこと、B.B.C.をはじめとするイギリスの教材が幅広く使われていること、それに香港に隣接していることなどである。最近になって、アメリカの教科書もいくつか使われるようになってきた。また、外国人英語教師のほとんどがイギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドの出身である。中国人にとって英語は、現在も国外とのコミュニケーションのためのエリート言語、すなわち国際共通語なのである。(本名、84 - 85)

### (3) 日本

日本は他国の言語から語彙などを取り入れて日本語を変化させてはきたものの、民族がほぼ単一であり、したがってほぼ全国単一言語（方言は別として）を使用し、また、他の国と比較すると多言語状況をほとんど経験していないと言える。この点、韓国を除き、世界でも特異な存在である。このことは、自国語で何でも表現できる恵まれた国であるという半面、英語教育に関しては緊張感の欠如した、英語使用の経験の少ない国であり、英語教育の点では苦戦をしている。これからの日本の英語教育を考えるためにも、日本の英語事情をみてみよう。(祖慶、107)

日本人は生来外国語を話すことを恥ずかしがる傾向があるといわれる。それは主に間違いを恐れることによる。間違いを恐れるから話さない。そして、話さないから、たまに話す間違う。だから余計に口が堅くなる。外国語、中でも、西洋の言葉である英語に関しては異常なほどに潔癖な完全主義的な対応の仕方をする。

ところが、一方、外来語を日本語の中に取り込むという技術においては非常に優れている。例えば、ブック、ペン、デスクのような昔からのものをはじめ、フリー、イメージ、カラー、サークル、チャレンジ、ゾーン、フォトグラフ、スペシャル、ローカル、イベント、リサーチ、モード、フィクション、ダイエット、インターナショナルなど挙げれば切りがない。さらに、和製英語と呼ばれる合成語（日本で作られた英語風の日本語語彙）も存在する。例えば、ペーパー・ドレイパー、スカイ・パーキングなどがある。

以上のように、日本人は英語を外來語として母語の中に取り込もうとするだけでなく、日本の文化にあった和製の英語を自ら造っていくというしたたかさともとれる行動をとる半面、先述したように、まだ英語そのものをコミュニケーションの道具として広く国際的に使うという点では、いまだに堅く口を閉ざしていると言えよう。(本名, 265)

もちろん、学校現場で生徒に英語を使って思考させ、英語の発想法を教えるのは自由である。それよりむしろ、お互いの国の、そしてその人々のそれぞれの英語を認めることこそが、その国の、あるいはその人々の自立と自主性を認めることに他ならない。こうしたことがわかるような自主性のある国際人を生み出すことを、これからの英語教育は目標にしなければならないのである。(本名, 277)

#### 【参考文献】

- 祖慶壽子 (2005). 『アジアの視点で英語を考える』, 朝日出版社.  
鳥飼玖美子 (2011). 『国際共通語としての英語』, 講談社現代新書.  
本名信行 (1998). 『アジアの英語』, くろしお出版.  
本名信行 (2003). 『世界の英語を歩く』, 集英社新書.

### 第3章 英語の歴史

#### 3.1 英語の歴史区分

英語の歴史は研究者によってその区分が違うが、以下のように区分される。

- 古英語 (500年～1100年)
- 中英語 (1100年～1500年)
- 近代英語 (1500年～1900年)
- 現代英語 (1900年～2000年以降)

古英語以前は、アングロサクソン語、近代英語は初期近代英語・後期近代英語に再区分される場合もある。英語の歴史を振り返る際に二つの歴史の視点を持って振り返る。それらは、外面史と内面史である。外面史とは、政治、経済、

文化などから影響を受けて変化してきた英語という言語の歴史である。内面史とは、英語の構造そのものが変化してきた歴史である。

### 3.2 外面史

これから古英語期以前から現代英語期までの外面史を辿っていく。

#### (1) 古英語期以前

##### ① ローマ人とケルト人

英語の歴史は5世紀半ば以降、ジュート人・サクソン人・アングル人・フリジア人のゲルマン民族がブリテン島に定住したことはじまるが、この島には紀元前1000年頃からケルト系の人々が住みついていた。ブリトン人とローマとの始まりは紀元前までさかのぼる。この「ブリテン」という名はラテン語では「ブリタニア」と呼ばれ、この島で生活をしていたケルト系民族のブリトン人（ラテン語では「プリトネス」）の土地という意味である。

ローマのユリウス・カエサル（在位100BC-44BC）が紀元前58年から一年ごとに合計8回も訪問したガリア（現在、フランスがある位置にほぼ該当する）への遠征のうち、紀元前55年と54年の2回はブリテン島への侵略を行った。最もこの遠征では現地のブリトン人の激しい抵抗に合い、またガリア自体が不安定な状態であったこともあり、ローマ軍は最終的には自国に引き返したため、支配権を獲得することはできなかった。結果的にこのブリテン島侵略は失敗に終わった。だが、紀元後43年にローマ帝国クラウディウス（在位10BC-54AD）によってブリテン島は征服された。これ以降、先住のケルト民族はローマ帝国の影響を受けることになった。

##### ② ローマ帝国の支配

西暦375年、北アジアに住む放牧民のフン族が西へと移動し、ゲルマン民族の西ゴート族と東ゴート族を制圧する。これがゲルマン人の大規模な移動のきっかけとなる。ゲルマン人はドナウ川を越えローマ帝国の敷地内へと入っていた。当然のことながらローマ帝国はゲルマン人との戦いに備えて、軍隊を大陸に集めておく必要がある。これらのことからブリテン島の防衛は次第に弱まり、ローマ帝国自体の支配力の弱体化も重なって、最終的にローマ帝国はブリテン島を手放すようになる。



一方、ローマ人が去ったあとケルト系のブリテン人は、ローマ帝国に支配されていた時代から続いていた、ブリテン島北方の民族（ケルト系のピクト人とスコット人）による侵攻を受けることになる。なお、北部一帯の防衛を目的にハドリアヌス皇帝（在位 76-138）の時代には、さらに北に位置する現在のエジンバラからグラスゴーにかけて、約 117 キロにも及ぶハドリアヌスの防壁を築いた。国外の脅威から守る態勢も整い、ブリテン島南部のローマ化は次第に進んでいった。英語がブリテン島に到る以前に、このように多くの民族がこの島を渡ってきていた。

## (2) 古英語期

### ① ゲルマン人の侵入

410 年には、ホノリウス帝（在位 395-423）はイタリアに侵略してきたアフリック率いる西ゴート族への対応を迫られた。こうした状況の中で、4 世紀頃には、ゲルマン人たちはそれまで居住していた北西ドイツおよびオランダから、新たな土地を求めて大がかりな移動を行い、現在アングロ・サクソン人と呼ばれているジュート人・サクソン人・アングル人の三大民族は 5 世紀中頃にブリテン島へと渡来した。

ブリテン島に住んでいたケルト人は、しばらくゲルマン人の攻撃に対して抵抗を試みていたが、次第に自分たちの居住区を奪われていった。そして、現在のスコットランド・アイルランド・ウェールズ・コーンウォール、そしてフランスのブルターニュ地方へと拡散していったのである。ちなみにケルト人は、ジュート人・アングル人・サクソン人をすべてまとめて「サクソン人」と呼んでいた。現在のようにブリテン島に定住したゲルマン人を「アングロ・サクソン人」と呼称するようになったのは、11 世紀に入ってからのものである。ブリテン島に定住したアングロ・サクソン人が自分たちの領土を拡大するにつれて、彼らの話す言葉（言語）もブリテン島に根付いていった。これが、英語の始まりである。

### ② ゲルマン人の定住

ジュート人・サクソン人・アングル人・フリジア人は、「ゲルマン民族の大移動」と言われる移動のなかで、5 世紀頃から 100 年ぐらいまでの間に徐々にブリテン島へ移動をはじめ、ジュート人はブリテン島の南東部のケント地方や

南部のワイト島、サクソン人とフリジア人はテムズ川南方、アングル人はテムズ川以北へ定住した。

もちろんブリテン島にはゲルマン民族が移動してくる前に先住民(ケルト民族)が存在していた。そこにはすでに旧石器時代から人類の足跡が見られ、イギリス南部のソールズベリ丘原に残る有名な巨石遺跡ストーンヘンジは紀元前 3000 年から紀元前 2000 年にかけて建てられたものである。

English や England に見られる Engl は Angle に由来し、本来はそれぞれ「アングル人の(言語)」、「アングル人の土地」を意味する。(寺澤盾, 21)

### ③ アングロ・サクソン七王国

ブリテン島に渡来したアングル人・サクソン人・ジュート人・フリジア人は、その後七王国を築き繁栄を極めるものの、長くは続かなかった。なお、七王国の主要都市はカンタベリーを有するケント、南西部まで勢力を拡大したウェセックス、ロンドン有するエセックス、その南部に位置するサセックス、東部のイースト・アングリア、北部のノーサンブリア、そして内陸部のマーシアの 7 つである。

侵入者であったゲルマン民族は、8 世紀末以降北欧からヴァイキングの侵略に悩まされていた。ヴァイキングとは、デンマークから来たデーン人とノルウェー人のことである。リンディスファーン島をはじめ、彼らは修道院や町を襲い略奪行為を働いていたが、6 世紀の末には教皇グレゴリウス(在位 540?-604)の命により、聖アウグスティヌス(在位 ?-604 初代カンタベリー大司教)が七王国の 1 つであるイギリス南東部ケント王国に遣わされ、キリスト教の布教がはじまり、彼らも教化された。(寺澤, 51)

また、七王国のうちの 1 つ、ウェセックスのアルフレッド大王(在位 849-899)は 878 年にデーン人と条約を結び、ロンドンからチェスター方向へ延びる線の東北側をデーン人の法で統治できる地域、つまりデーンローとして認めた。これによって、一時的には、さらなるデーン人の進出を抑えることはできたが、1016 年にはデーン人のクヌート(在位 994?-1035)がイギリス王になるという事件が起こった。(寺澤, 54)

### (3) 中英語期

1066 年ノルマンディーのフランス系ノルマン族がブリタニアを征服し、王

侯、貴族、騎士、聖職者などの支配階級はみなフランス人になり、イングランドはフランス文化圏に入った。しばらく上流階級は行政、裁判の公文書にはフランス語を使用し、学問にはラテン語を使用していた。一方、一般大衆は社会的下位に属し、英語を使用した。フランスとイギリスとの間で百年戦争が1337年から1453年まで起こり、イングランド国民に国家意識が芽生えていった。14世紀後半には、議会も英語で開会、聖書が英訳され、大学の講義も英語で行われ、ジェフェリー・チョーサーの『カンタベリー物語』のように文学も英語で書かれ、英語の地位が少しずつ向上した。(堀部秀雄, 12 - 13)

#### (4) 近代英語期

30年に渡る王位継承戦争であるバラ戦争が終わり、1485年のヘンリー7世の戴冠から1625年のジェームズ1世の崩御までの時期に、イギリスはかつての小国からヨーロッパにおける大国へ変わっていった。ロンドンの人口が6万人から25万人に増加し、1588年にスペインの無敵艦隊に勝利した。その後、17世紀の清教徒革命と名誉革命という2つの市民革命により近代化が進み、18世紀のスペイン継承戦争とナポレオン次いで、新大陸の発見とそれによる東インド会社の経営により、多くの植民地を作ってきた。また、ドイツでのグーテンベルグの印刷機械の発明によって出版が安価にできるようになり、イギリスもロンドンでウィリアム・キャクストンが印刷を始め、綴り字の固定化など書かれ読まれる英語の基盤の確立にも寄与することになった。このことが、英語の標準化の始まりとなった。(加藤和光, 15)

#### (5) 現代英語期

ボーダレスやグローバルという言葉が頻用され、地球全体を一つに考える傾向が強くなるのと、反対に、民族主義や多元主義も世界規模で浸透している状況がある。このような状況の中で、英語は、航空管制や海上交通において世界で統一されて使用されている。また、国際通貨基金、オリンピック、世界宗教団体、キリスト教団体など、国際的な団体の交流にも使用されている。この傾向には、第二次世界大戦におけるアメリカの政治及び経済での世界的影響によるものが大きい。(加藤, 13) アメリカの人口は移民で増え、19世紀の終わり頃までに、ドイツから500万人、アイルランドから400万人、中部ヨーロッパから300万人、イタリアから200万人、スカンジナビアから170万人が移住し

てきた。他にも世界中から多くの民族や人種がアメリカに移住し、アメリカには世界が集約された状況にあった。また、人権の運動が、1950 年後半の人権差別に反対する運動から始まり、*chairman* が *chairperson* に変わるような言葉において、その影響を受けることになる。(加藤, 16)

イギリス英語・アメリカ英語以外の英語への関心も高くなっている。あえて *Englishes* という複数形を使用する動きも急速に広がっている。この傾向は、*World Englishes* という学術雑誌が創刊された 1980 年代以降に顕著になっている。

*Englishes* は、*British English*, *Scottish English*, *Irish English*, *American English*, *Canadian English*, *Australian English* のような区別を行うとともに、アメリカの中でアフリカ系アメリカ人の使用する *African-American Vernacular English* と呼ばれる変種やイギリスの中で *Cockney English* や *Estuary English* と呼ばれる変種の存在も認めている。また、アフリカ、インド、東南アジア、カリブ海沿岸地域などに広がった英語は、それぞれの地域の特徴を取り込みながら、独自の発展を遂げている。(家入葉子, 108 - 109)

### 3.3 内面史

次に内面史として英語の変化を言語的な側面から述べてみる。英語の起源は、デンマークのあるユトランド半島で生活していたジュート人、同様にユトランド半島南部に位置するホルシュタイン地方のサクソン人、ユトランド半島南部シュレースヴィヒ地方のアングル人たちが使用していた言語である。

その英語は、ドイツ語・デンマーク語・オランダ語などの言語と同じく、言語学の歴史において、インド・ヨーロッパ語族の中のゲルマン語派と呼ばれる言語グループに所属している。古英語はドイツ語と似ていた。1500 年が経つと、さまざまな要因から、英語にも変化が起こってきた。

#### (1) 古英語期

##### ① 文法

古英語は西ゲルマン語から派生した言語であり、名詞、代名詞、形容詞の格、性、数を中心とした語尾の完全屈折の特徴をもっていた。しかし、ラテン語やギリシャ語に比べてかなり複雑な屈折はしなかった。屈折があったおかげで、

語順は目的語が主語を先行できるように自由だった。古英語後期には、格変化が衰退し前置詞がその役割を代用することになった。

## ② 語彙

古英語期には、西ゲルマン語の名残である純粋なゲルマン語のものばかりではなく、6世紀にキリスト教が入ったことで、**mass** や **priest** のようなラテン語が借用語として多く入ってきた。8世紀から11世紀には、アングロ・サクソン人とデーン人との共存があり、デーン人の話していた北ゲルマン語の古ノルド語が **sky** や **skirt** のような日常語として入ってきた。また、ブリテン島の先住民であったケルト人からは **London** や **Thames** のような地名を借用語とした。

## (2) 中英語期

### ① 文法

名詞、代名詞、形容詞の屈折が消失していった。名詞の複数単数名詞に **-s** をつけ、動詞においても、弱変化動詞の過去形は **-ed** をつけるという簡略化したものになった。古英語後期から起きていた格の消失によって、前置詞が頼用されることになった。14世紀には、性が文法性から自然性へと変化していった。代名詞の **he** や **she** は、名詞の自然性を受けて一致させるようになった。形容詞の性は、まったく消失した。性の消失で、外国語からの借用をますます自由にできることになった。

### ② 語彙

宮廷ではフランス語が使用されていたため、多くのフランス語が入ってきた。また、当時ヨーロッパで広範囲に使用されたラテン語も入ってきた。そのため、**rise**, **mount**, **ascend** のように本来の英語、フランス語、ラテン語だった語源の異なる同義語が今日まで残る原因を作った。15世紀には、グーテンベルグの印刷術の導入も要因となって、綴り字は定着したが、長母音の発音が、数百年かけてゆっくりと大変動を起こす大母音推移があった。このことで、英語の発音と綴りは乖離し始めた。

## (3) 近代英語期

### ① 文法

文法は規範文法であり、**to abruptly stop** のような不定詞の **to** と動詞の間に副詞を挟む分離不定詞は批判の対象になった。しかし、後期近代英語では、二人称代名詞において **thou** と **you** の違いが失われた結果、**you was** のような単数形が流行する現象もあった。

## ② 語彙

ルネッサンス期には、古典への関心が高まり、**system** や **scheme** のように、ラテン語から多くの語彙が積入された。

17 世紀以降のアメリカへの移住と、それに伴う語彙の拡大がある。アメリカ英語には、**tomahawk** のように先住民の言語から取り入れたもの、他のヨーロッパ諸国からアメリカに移住した人々の母語から取り入れたものがある。

## (4) 現代英語期

### ① 文法

**government, committee, team** などの集合的な名詞が単数扱いされるか複数扱いされるかの揺れが生じている。アメリカ英語では、単数で受ける傾向が強く、イギリス英語ではその逆である。(L. Bauer, 61-66) 20 世紀後半以降、**someone** を **he** で受けることに抵抗が感じられるのか、**he or she** や **they** で受けることが増えてきた。形容詞 **different** に後続する前置詞は **from** であるが、**from** 以外にもアメリカ英語では **different than** やイギリス英語では **different to** を使用する傾向がある。(家入, 106)

### ② 語彙

20 世紀以降の科学技術の発展によって、多くの語彙が必要になった。その多くは **tele-** で始まる語や **holism, holistic** のように、語形成能力の高いギリシャ語が大いに寄与している。アメリカ英語とイギリス英語では、イギリス英語の **film** はアメリカ英語の **movie** に、**petrol** は **gas** に対応するなど、多くの違いがある。また、同じ語でも **hearb** の **h** を発音しないのはアメリカ英語であり、イギリス英語では発音される例も多い。今日ではアメリカ英語の綴りがイギリスで使用されたり、その逆も存在するようであり、両者の区別はワープロが機械的に判断するほど単純なものではなくなっている。特に最近では、インターネットの検索を意識して綴りを決めることが多いようである。それは、より広く使用されている綴りを使ったほうが有利であると考えられる傾向が

あるからである。(家入, 108) また、考え方の多様化、新たな概念の導入などに伴いスウェーデン語から入った **ombudsman** のように様々な国の語彙が入ってきている。(家入, 15)

現代の英語の姿に至るまでに、上記のような言語的变化が起こり、その変化は今後も起こっていくだろう。マイナーな地位にあったものが突然拡大し始める場合もあれば、異なる形式が競合しながら何百年間も共存し、徐々に一方が勝利していくということもある。それらは、言語が抱えている「揺れ」であり、言語の宿命であろう。(家入, 102) もちろん、それらは英語の外面史と深く関わっていることは言うまでもない。

### 3.4 英語が国際共通語になる条件

英語が現代のように国際共通語になれる条件があった。その姿になっていく過程において、特記すべきは、古英語期からの変化過程において、文法が簡略化したこと、それによって他の言語からの語彙の受容能力が高いことである。それらは、言語が国際語になっていくための必須の条件であるといえよう。

さらに、英語が国際共通語として地位を得る条件として、英語が植民地での現地言語と接触する過程において、リンガフランカ (Lingua Franca) になり、そこで形成された英語が、ピジン (Pisin) 化及びクレオール (Creole) 化したことも特記すべき点である。

#### (1) リンガフランカ

使用する言語が違う人やある集団の間で、意思の疎通が必要な状況が作り出されることがある。これを「言語接触」という。このとき、臨時的・習慣的、あるいは制度的に使用する言語が「リンガフランカ」である。つまり、リンガフランカとは、「母語の異なる人々が、相互にコミュニケーションを促進するために習慣的に用いる言語」である。元来は、中世以降の地中海沿岸で通商用に使用され、「フランク王国の言葉」を意味するイタリア語にフランス語・ギリシャ語・アラビア語などが混じった混成語のことである。また、混成語ではなく関係する複数の言語のうちの1つが共通語として使用される場合もある。

例えば、ある場所でアジアの企業のトップがそれぞれの部下と共に商談を行っているとする。それぞれのトップが自国の言葉しか話すことができない、外

国語が理解できないという状況であるとき、誰に対しても不公平とならない第三の言語である共通語を使用するメリットが生まれるのである。共通語が誕生した背景には多くの場合、商談を円滑に進めるためでもあった。

このような共通商用語として、現在でもリングフランカは使用されているのであるが、その歴史は古く、多くの場合異なる民族同士の貿易などの場面においても、民族や国家の発展のためにリングフランカは大きな役割を果たしてきたといえる。中世の地中海貿易で、特にアフリカ北沿を中心に行われた取引に使用された混成語をサビール語と呼ぶが、これはロマンス語系のイタリア語やスペイン語などを基盤とし、それにアラビア語などが加えられて成立した共通商用語であった。

リングフランカの使用方法は実に多様である。例えば、ギリシャのコイナーは、古代の世界でリングフランカとしてさまざまな時代で機能した。コイナーはギリシャ語で「共通語」を意味する。紀元前4世紀から6世紀にわたって、ヘレニズム世界で使用されたギリシャ中南部地方の方言である。アッティカ方言にイオニア方言の要素が加わって生まれたものであるが、アレキサンダー大王の遠征とともに、ギリシャやマケドニアばかりではなく、アジアやアフリカにも及ぶ広大な地域での共通語となっていた。つまりコイナーとは、ある一定地域の方言にしか過ぎなかった言葉が、より広い地域における共通語となった言語なのである。

東アフリカ諸国の公用語として使用されているスワヒリ語も、インドネシア、マレーシア、ブルネイ三ヶ国の国語であるマレー語も、ともに元は通商言語であり、いずれも8世紀頃に形成された。前者は同地域とアラビア諸地域との貿易に用いられ、後者はムラユ族と呼ばれる一族民が同地域で発生する香木や胡椒などの珍貨を小舟に載せて、多くの島々を巡る島嶼貿易の用具としてのムラユ語を中心として、それに各地の方言が加わってできた共通商用語であった。

このようにさまざまな種類の言語が存在すること自体、スワヒリ語がリングフランカとして使われていたことを指し示すものであるが、実際に多くの人々が使用していたのはビジン化されたザイル・スワヒリビジン語であったのである。この点で言えばザイル・スワヒリビジン語を使った人々も、現在英語をリングフランカとして使用する大多数の人々も変わらない。なぜならば、英



語をリンガフランカとして使用する人々は標準英語を使用するのではなく、ザイール・スワヒリビジン語と同じようにビジン化された英語、つまり英語ビジンを使用するからである。今日、ザイール・スワヒリビジン語は構造編成されたスワヒリ語になっており、海岸沿いのスワヒリ語とはかなり異なったものになっている。

## (2) ビジン・クレオール

ここで、あらためて、ビジン及びクレオールについて述べたい。共通の言語を持たない人同士のコミュニケーションツールとして用いるために作られた、混成語を「ビジン」という。これを母語として話すようになると、「クレオール」と呼ばれるようになる。

ビジンやクレオールが使用されている地域は、赤道地帯に集中しており、多くの場合海に面しているか、または、海へ比較的簡単に近づけるところである。つまり、カリブ海域・南アメリカ北東部の沿岸・アメリカ西海岸、またインド洋や太平洋に臨んだ地域が集中している。これらの地域は、かつてのヨーロッパからの植民地開拓者や貿易商人が活躍した地域と重なる。

これらの地域に関する基礎的な知識としてはハンコックの調査がある。127のビジンとクレオールをリストに挙げている。その中で35種類は英語が基盤となっていると言われている。英語以外にも、フランス語(15種類)・ポルトガル語(14種類)・スペイン語(7種類)・オランダ語(5種類)・ドイツ語(6種類)が基盤となったものがある。その他、ロシア語・ノルウェー語・チヌーク語・ヌートカ語・スワヒリ語・アラビア語などがある。このように、現在も使用されていることがわかっている100以上のビジンやクレオールの多くは、ヨーロッパ言語の一つを基盤としている。

では、ビジンはどのような背景で生まれるのだろうか。ビジンという現象そのものは持続的であり、世界中でビジンを使用している人々は世界中で200万人から1200万人の間であると推測されている。例えば、パプアニューギニアで話されているビジン・トクピシンは、英語を話す統治者と原住民とのコミュニケーションを図るために今世紀の間に形成された言語である。パプアニューギニアは世界でも有数の多言語社会で、人口300万で700以上もの異なった母語が話されている。支配者グループが原住民に命令を下すだけでなく、お互い

に意思疎通が難しい原住民同士でも、トクピジンは共通語の役割を果たしてきた。現在では約 100 万人（国民の 3 分の 1）がトクピジン話し、クレオール化も進んでいる。

ピジンは、開拓地に奴隷として連れて来られたアフリカの人々の間でも発達した。支配者は農園で奴隷に労働をさせる際に、造反を恐れて同じ母語を話す者同士が固まらないよう別々にしたのである。統治者からの作業命令を受ける際や自分たちの間でお互いの意思疎通を図らなければならない場合の唯一の方法がピジンであった。ピジンの発達には、標準言語という基準が身の回りに存在しないことも大きな要因となる。つまり、支配者と接する機会が多かったならば、奴隷たちは支配者の言語を身につけたかも知れない。しかし、お互いに十分な接触と信頼がない環境では、一般に支配者の言語を基盤としたピジンが形成されていった。

ピジンは、どの言語が基盤となって取り入れられているかによって分類されることがある。先述したように、ピジンやクレオールの多くは、英語・フランス語・ポルトガル語・オランダ語・スペイン語などのヨーロッパ語を基盤としている。これは植民地支配の歴史を反映している。

ところで、ピジンは、その成立過程と簡単な言語構造のために、不完全な結果生じた、一人前でない言語とみなされる傾向があった。ピジンの発達段階は一般に、次のように考えられている。

混成語→安定したピジン→拡大ピジン→クレオール

ピジン形成初期は、人によって、あるいは状況によって言語の簡略の仕方によってばらつきがある。しかし、それも次第にその社会集団の中で一定になってくる。次の拡大された段階にまで至るピジンの数はかなり少ない。よく知られているのはトクピジン (Tok Pisin) や西アフリカのピジン英語で、言語構造や機能が前段階より複雑になっている。(中尾・日比谷・服部, 161 - 162)

(3) ピジンからクレオール、そしてその後

たいいていの場合、ピジンはその有用性が消失すると存続できなくなってしまうのだが、状況によっては、特定の地域の母語となることがある。例えば、異言語社会でお互いの意思疎通のために、リングフランカとして使用されるよう

になったピジンが、その便利さゆえに次世代に母語として受け継がれる場合である。その際、すなわちピジンが特定の地域の母語となった場合に、これをクレオールと呼ぶ。つまり、「クレオール=母語化したピジン」であり、ピジンが母語化することを「クレオール化」という。

クレオールの主な特徴を挙げると、ピジンと同様に複数の言語接触によって作り出される言語であるということである。ピジンにはさまざまなレベルがあり、基礎的なレベルから唐突にクレオールになることもあれば、安定化または拡大化したピジンが何世代もかけて段階的にクレオールになることもある。また、世界中に存在する数多くのクレオールには接触した言語の違いに関係なく根本的な部分で、時制・相・法の表現方法などいくつか構造的な特徴が共通してみられる。クレオールは特定の地域の母語であるという事実、つまりその地域の生活のすべてを担う普遍的な言語なのである。

もちろん必ずしも全てのピジンがクレオール化の過程を経ることができるわけではない。大半のピジンはリンガフランカであり、ある集団の必要性に対応して存続している。ピジンはそれぞれ他の言語を使う人々がお互いの共通理解を得るために話しているものであり、もし必要性を感じなくなればピジンは消滅してしまう。

標準言語を有的に使用することができない状況の中ではじめて、ピジンからクレオールに変化する。

すなわち次世代の人々がピジンをクレオールにするのである。どのような経緯があってピジンが発展してクレオールになるのか。その様式と役割を考えるならば、トクピシンの例が役に立つだろう。トクピシンでは時制や数詞のような文法カテゴリーが不可欠で構成も発展してきており、談話構成のための方法が既存し、さらに様式的な区別をする場合もある。

機能に関するかぎり、トクピシンは新しい文化の象徴になってきている。今やトクピシンは政治・宗教・農業・航空といった多くの全く新しい領域で使用されており、そしてこれは多くの地域で現地語や英語にとってかわってきている。

現在トクピシンに起きていることを3つに分けて挙げると、一つ目は、人々がピジンよりもクレオールを速く話し、単語ごとにとぎれとぎれに話したりは

しないということである。したがって、現在トクピシンには同化と短縮化が働いているということである。例えば、*ma bilong mi* (“my husband”「私の夫」) は *mamblomi* になる。二つ目は語彙の供給源の拡大である。短い単語が新しく形成されるために、例えば、*paitman* (“fighter”「戦士」) という単語が *man bilong pait* (“man of fight”「戦う人」) と共存している。また多くの技術用語が英語から借用されている。

三つ目は動詞の時制体系の発展である。*Bin* は過去時制の標識として用いられ、*baimbai* (“by and by”「やがて」) から来ている *bai* が本来時制の標識として用いられている。そのような変化を通じ、元々のピジンは急速に完璧な言語へと発展しつつある。これぞクレオールと呼ばれるものであるが、この場合は起源がわかっているからクレオールとわかるのである。すなわち、クレオールだとわかるのは単にその起源がわかっているに他ならない。(ロナルド・ウォードハフ、105-106)

英語もこのような変化過程を経て、植民地の中に英語のピジン化やクレオール化につながっていった。このことも、英語が国際語になった条件と言えるだろう。

### 3.5 英語の多言語との接触

ブリテン島に定着した英語と他の言語との接触を、古英語期に至るまでの紀元前から始めると、英語がブリテン島に至るまでには、様々な言語が既に存在し、後に英語と接触してきたことがわかる。

紀元前には、ケルト民族の一派であるピクト人の使っていたピクト語や同じ民族の一派であるブリトン人の使っていた古代ブルトン語があった。ちなみに、同言語では、*British* という呼称は、ウェールズ語の祖先を意味していた。

紀元前 3 世紀頃には、古英語の時代を含んで、アイルランド語、ラテン語、ノルウェー語、ノルド語があった。これらも、古英語の英語と接触した。アイルランド語は、現在の北ウェールズや南ウェールズを植民地にしていたアイルランドのケルト民族によって使われ、中世までその命脈を保った。ラテン語は、紀元前の末期から 5 世紀の初頭までブリテン島を支配したローマ人によって使われてきた。ノルウェー語は、紀元前 8 世紀頃にブリテン島にやってきたパ

イキングたちが使っていた言語で、10世紀頃には最も広く使われ、13世紀の初頭には死に絶えた。ノルド語は、紀元前の末期までシェットランド島などで使われてきた。特に、ラテン語は、他のヨーロッパ言語の祖先となり、英語に接触することによって、多くの語彙を英語の中に入れ、英語を話す者に新たな文化的影響を与えた。

さらに、中英語の始まりには、1066年のノルマン人の征服で入ってきたノルマン・フランス語、1066年にフランス語とともにやってきたフラマン語、そしてジブシーが使っていたロマニ語、英語との接触で消滅した言語の一つとしてカンブリア語があった。この中でも、ノルマン・フランス語は、宮廷の言語であり、beef や pork といった語彙の例で分かるように、英語話者に生活のレベルから影響を与えた。

外面史でも述べたように、近代英語期に入り、特にエリザベス一世の治世から、英国の国力は、自他共に武力及び経済でも発展を遂げる。そして、海外に多くの植民地を作ることができ、莫大な富と世界の覇権国としての力を得ていた。その絶頂期は、19世紀のビクトリア女王の治世であった。

その過程で、現在の英語母国圏及び公用語圏は、かつての植民地であり、ここでは英語と現地ごとの接触の中で、英語と現地ごとのピジン化及びクレオール化が進んでいったことは容易に想像できる。歴史が進むに連れて、世界の情勢が変わり、国々の力のバランスが変化することによって、国際共通語としての認証は、今後も変わっていく可能性を持っていないとはならないだろう。

本章では、英語の国際共通語になる条件を英語史の面とリングフランカとピジン・クレオールの面から見てきた。英語がそうなるには、本来持っている文法の簡略化と他の言語からの語彙の受容能力の高さがある。また、近代に入って大英帝国になったイギリスが、その政治や経済において国力を増すことによって、多くの植民地をつくってきたことや第二次世界大戦後に政治、経済、文化の大国になったことで、多くの地域に英語のピジン化やクレオール化が起きたことも、英語が国際共通語になった条件として特記できる。

#### 【参考文献】

家入葉子(2007). 『ベーシック英語史』, ひつじ書房.

- ウォードハフ, ロナルド (田部滋・本名信行監訳) (1994). 『社会言語学入門 (上)』, リーベル出版.
- 加藤和光 (1996). 『文化の流れから見る英語』, 三修社.
- 寺澤盾 (2008). 『英語の歴史』, 中央公論新社.
- 中尾俊夫・寺島迪子 (1988). 『図説英語史入門』, 大修館書店.
- 中尾俊夫・日比谷潤子・服部範子 (1997). 『社会言語学概論 日本語と英語の例で学ぶ社会言語学』, くろしお出版.
- 中村敬 (1991). 『英語はどんな言語か——英語の社会的特性』, 三省堂.
- 堀部秀雄 (2002). 『英語観を問う』, 溪水社.
- Bauer, L. (1994). *Watching English Change*. London: Longman.

## 第4章 音声学

### 4.1 はじめに

世界に多数ある自然言語の中で、文字のない言語はあっても音声のない言語は存在しない。言語は意思伝達を音声によって行うことから始まる。ことばとして用いる音を言語音 (speech sound) と呼び、その分析とその特徴を記述するのが、音声学 (phonetics) である。本章では、私たちが身体の中のどの部分を使って言語音を出し、その言語音にはどのようなものがあるか分類し、音の組み合わせとアクセントなどの言語音に関連する他の事項を見ていく。

### 4.2 ことばと音声

#### (1) 発音器官

私たちは肺から出る空気を使って音声を出す。そしてさまざまな種類の音声を出すために、空気の通り道にあるさまざまな器官を動かしている。これらの器官を発音器官と呼ぶ。肺から出た空気 (呼気) は器官を通して上がっていき声帯 (vocal cord) を通る。

声帯は一對のひだのような筋肉からなり、開閉する。この筋肉の間の空気の通り道を声門 (glottis) と言う。声帯が完全に閉じてしまうと空気は出てくることができず息ができない。私たちは「ないしょ話」をするとき、声を出さずに息だけ出している。この時声帯は

大きく開いている。声を出して話をするときには声帯はゆるく閉じてわずかに開いた状態になっている。この時、肺からの空気は狭い声門を通るため摩擦を起こし、声帯の筋肉を振動させ声を生じさせる。この振動が空気の振動となって伝わり、空気の出口付近の口腔（こうこう）や鼻腔（びこう）で共鳴して声になる。声帯あたりを喉頭（こうとう）、そしてその上の、喉の奥の部分を咽頭（いんとう）と言う。

上あごである口蓋（こうがい）の一番奥の部分には口蓋垂（こうがいすい）と呼ばれる部分があり、口を大きく開くと真ん中の奥にぶらさがっているのが見える部分である。口蓋垂が下がっていると呼吸は口と鼻の両方へ抜け、鼻にかかった音が出る。口蓋垂が上がると鼻への通り道はふさがれ呼吸は口からのみ出てきて、鼻にかからない普通の音が出る。

発音器官の中で最も複雑に動くのが舌であり、舌と同時に下あごも動くことから口腔の形はさまざまに変化する。口蓋はほとんど動かないが、歯茎、硬口蓋、軟口蓋と言う部分に分かれる。上の歯の根元のすぐ上を舌先でさわってみるとわずかな出っ張りがあるが、その部分が歯茎である。そこから奥へ進むと固くてごつごつした部分があるが、その辺りが硬口蓋である。口蓋のさらに奥の部分、口蓋垂へ続いている部分は柔らかくなっていて、その辺りが軟口蓋と呼ばれる。

## (2) 言語音の分類

### ① 有声音・無声音

肺から出る空気が言語音になるとき、まず声帯の動きによって有声音と無声音に分かれる。声帯が大きく開いて肺からの空気が声帯を振動させずに外に出てきた時の音が無声音、声帯がわずかに開いて空気による振動をとまなう（すなわち声をとまなう）音が有声音である。

### ② 鼻音

空気が咽頭を抜けてきた時、口蓋垂が下がっていると空気は鼻腔へ抜けて鼻音になる。英語や日本語では鼻音を発音する場合、口腔の中で閉鎖が起こっているため、空気は口腔へは抜けず鼻腔からのみ出ていく。「ママ」と言いながら鼻の下へ指をあてると息が出ているのが分かる。口の構えは同じでも「ハシ」と言っていると、空気は鼻ではなく口から出ているのが分かる。この時、口蓋垂は持ち上げられ鼻腔への空気の通り道は塞がれている。

### ③ 母音・子音

呼吸が口腔を通る時、その流れが妨げられる度合いの大きさにより言語音は母音 (vowel) と子音 (consonant) に分かれる。空気があまり妨げられることなく出てくる音が母音、口

腔内で空気の流れが妨げられて出てくる音が子音である。

(子音の種類)

子音は次の3つの基準によって分類される。

- a. 声の有無 (有声・無声)
- b. 調音位置 (調音点)
- c. 調音法

調音位置は口腔の主にとどの部分で呼気の流れが妨げられるか、すなわちどの部分を使って調音するかである。調音法は呼気の流れがどのように妨げられるかである。調音位置には、次の8種類がある。

両唇音：上下両方の唇で調音する。

唇歯音：上の歯と下唇で調音する。

歯音：上の歯と舌先で調音する。

歯茎音：歯茎部分と舌先で調音する。

硬口蓋歯茎音：歯茎から硬口蓋にかけての部分と前舌面で調音する。

硬口蓋音：硬口蓋と前舌面で調音する。

軟口蓋音：軟口蓋と後舌面で調音する。

声門音：声門で調音する。

調音法には次の6種類がある。

閉鎖音 (破裂音)：口腔内のある部分で呼気の流れを一旦止めてから急に開き破裂するように発音する。

摩擦音：口腔内のある部分で呼気の通り道を狭くして、その狭い所から呼気を押し出して発音する。

破擦音：閉鎖音と同様、呼気の流れを閉鎖したあと、急に開くのではなく狭い隙間を作り、そこから呼気を押し出して発音する。

鼻音：閉鎖音と同様、口腔内で呼気の流れを閉鎖するが、口蓋垂を下げることによって呼気を鼻腔へ抜いて発音する。

側音：舌先を歯茎につけ、呼気を前からではなく舌の両面から出して発音する。

半母音 (移行音)：舌がある位置から母音の調音位置へ移行する時に発音される短い音で、摩擦音に近いが呼気の流れの妨げが少なく母音に似た性質を持つ。



### (母音の分類)

母音は口腔内で呼気の流れが妨げられないことがないので、子音とは異なった分類をする。母音はまず、舌の最高点（舌が一番高くなっている部分）の高低と前後関係で分類される。母音はまた唇の形でも分類される。舌の最高点の高低による分類では母音は次の3種類に分けられる。

高母音：舌の最高点が高く、口の開き方が少ない。

中母音：舌の最高点が中ほどの母音。

低母音：舌の最高点が低い母音で、口が大きく開く。

舌の最高点の前後関係による分類でも母音を次の3種類に分ける。

前舌母音：舌の前部が最も高くなる母音で、舌は口腔の前よりにある。

中舌母音：舌の中央部が最も高くなる母音。

後舌母音：舌の後部が最も高くなる母音で、舌は口腔の奥に引っ込む。

唇の形による分類は、唇が丸いか丸くないか、という2種類である。

円唇母音：唇を丸めて発音する母音。

非円唇母音：唇を丸めないで発音する母音。

### (緊張母音・弛緩母音)

アメリカ英語では特に高母音と中母音において、舌や唇の緊張度によって区別する場合がある。一般に [i:] と [u:] など [:] がついた音は長母音、[I] と [U] など [:] がつかない母音は短母音と呼ばれ、その違いは長さだと誤認されがちである。これらは、長さではなく、唇や舌の緊張度が異なり、音質が全く違うのである。長母音を緊張母音 (tense vowel)、短母音を弛緩母音 (lax vowel) と呼ぶ。

### (二重母音)

英語には日本語にないものとして二重母音と呼ばれる音がある。例えば、[ei] は日本語でエイと2つの母音を連続して発音すればよいと思われがちであるが、そうではなく1つの音として発音が認識されるのである。[ei] は、[e] の部分が中心で強く長く発音され、その後、舌は[i]の位置へ向かって動いていき、この部分は弱く短い発音になる。

### 4.3 音の組み合わせとアクセント

#### (1) 音素・異音

人間がことばを話す時、同じ音を出しているつもりでも、発音された音を物理的に測定してみると微妙に異なった音を出していることが分かる。英語の話者は **pot** の最初の音を息の破裂をとまなう [p<sup>h</sup>] という音で発音するが、**top** の最後の音はほとんど息が出ない [p̥] という音で発音する。それでも話者は2つの音を同じ音で発音しているつもりであり、聞き手も2つの音を同じ音として認識しているのである。この人間が認識する音を音素 (phoneme) と呼ぶ。

音素は実際に出される音ではなく抽象的な概念としての音と言ってよい。音素は /p/ のように斜線で囲んで表記する。これと区別して [p<sup>h</sup>] や [p̥] のような実際に出される音は音 (phone) と鍵括弧で囲んで表記する。これらの音は、それぞれが現れる環境が決まっていて、一方が現れると他方は現れない。また、この2音は互いに入れ替えても異なる単語にはならない。この2音は /p/ の異音 (allophone) であると言う。

#### (2) 最小対 (ミニマルペア)

音素は語の意味を区別する働きがある音声上の最小単位でもある。英語では /p/ と /b/ は異なった音素なので、/pig/ と /big/ は異なった単語として認識される。この pig と big のように、同じ場所にある音素が1つだけ異なる以外は同一の音素を持つ2つの語 (ペア) を最小対 (ミニマルペア) と言い、1つの言語の音素を選び出す手段として使われる。

#### (3) 音の変化

##### ① 同化

ある音が前後の音の影響を受けて、その音と同じ、あるいは似た音に変化することを同化 (assimilation) と言う。英語では子音が2つ以上連続する場合に主に見られる。これは隣り合う音の発音をできるだけ似せて楽に発音しようとするプロセスである。

have to [hæv] [tə] → [hæftə]  
of course [əv] [kɔ:rs] → [əfkɔ:rs]

上の下線部の音は1語で発音すれば有声音の[v]であるが、後ろの音 [t] [k] が無声音のため、それに合わせて有聲から無聲へと変化している。これは声の有無について起こった同化現象で、後ろの音の影響で前の音が変化しているので進行同化と言う。英語では、前の音の影響で、後ろの音が変化する進行同化は少ないが、名詞の複数形を作る -(e)s 部分の発

音に [s] (books), [z] (dogs), [ɪz] (boxes) と、単語によって違いがあるのは進行同化が関係している。

won't you ([wɒnʌt ju:] → [wɒn tʃu:])

could you ([kʊd ju:] → [kʊ dʒu:])

上の例は下線の 2 つの子音が並ぶことによって影響を与え合い同化・融合を起こして 1 つの子音 [tʃ] [dʒ] になっている。歯茎音 [t], [d] が後ろの硬口蓋音 [j] に引かれて調音位置が変わり、歯茎硬口蓋音 [tʃ] [dʒ] になった。これは相互同化と呼ばれ、英語では多くの語に見られる口蓋化現象である。

## ② 脱落

英語では連続する子音の 1 つが発音されないことがある。これが脱落 (elision) である。part-time の [t], can not の [n], this side の [s] の例がある。

## (4) 音節

人間が言語を話す際に 1 つのまとまりと意識している音声の単位を音節 (syllable) と言う。英語話者は English を発音する時 [ɪŋ-lij] のように 2 つの音の単位を意識する。話者は単語を音素のつながりというよりは音節で区切ってとらえるのである。また、音の強弱、高低といった要素も音節という単位に現われる。

音声学的に音節を定義するために「聞こえ度」という概念が用いられる。これは各音に固有の「響き渡る度合い」ということで、呼吸が発音器官でどれだけ妨げられずに出ていくか、に比例している。呼吸の流れが自由な母音は聞こえ度が大きく、呼吸の流れを一旦止めたり、呼吸の通り道を狭くする子音は聞こえ度が小さい音になる。音節は聞こえ度の高い母音を核として、その前後に聞こえ度の低い子音が結合してできた単位である。したがって、母音のみでなく子音の中で比較的聞こえ度の高い [l], [m], [n] も音節になる場合がある。

人間の言語で最も基本的な音節は母音の前に子音が 1 個ついた構造であると考えられている。母音を V (vowel), 子音を C (consonant) で表わすと CV という構造に表記できる。英語は cat [kaet] のような CVC の構造が基本である。英語の音節では、母音の前につく子音と母音の後につく子音の子音結合 (consonant cluster) があり, strangles [straɪŋglz] のように、子音の数は最大、母音の前に 3 個、後ろに 4 個まで可能である。

## (5) アクセント

アクセントとは単語や句や文の中のある音節を何らかの手段で際立たせるもので、強勢アクセント (stress accent) と高低アクセント (pitch accent) がある。英語は強勢アクセントをもつ言語で、強勢が置かれる (アクセントがある) 音節 (実際にはその音節の母音) が強く発音され、それにともなってその音節は若干長く、音が高くなり、呼気の量も多くなる。逆に強勢がない音節は弱く短く発音され、母音があいまい母音 [ə] になり、時には脱落する。

## (6) 語強勢と文強勢

単語の中の音節の置かれるアクセントを語強勢 (word stress) と言う。2 音節以上からなる語で最も強く発音される部分が第一強勢、次に強く発音される部分が第二強勢と言われる。例えば LAN guage, to DAY, CHARacter, compreHEND, comMUnicate がある。

語強勢には語の意味を区別する機能がある。これは同一の音素配列を持つ 2 語を音の強弱の違いによって区別するもので、英語の場合ほとんどが同語源で品詞が異なる語の区別である。例えば, re CORD (動詞) / RE cord (名詞) や ab SENT (動詞) / AB sent (形容詞) とペアがある。

2 語以上の語が結びついてきた複合語は、同じ語群からなる句と、意味だけでなく強勢の型も異なる。一般に句の場合は後方に置かれていた強勢が、複合語になると前方に置かれる、という傾向がある。例えば, black BOARD (黒い板) / BLACK board (黒板) や green HOUSE (緑の家) / GREEN house (温室) がある。

英語で文中の語に置かれるアクセントを文強勢 (sentence stress) と言う。一般に、名詞、動詞、形容詞、副詞、指示代名詞、疑問詞、感嘆詞といった、しっかりした意味を持つ内容語 (content word) には文強勢が置かれる。一方、冠詞、人称代名詞、助動詞と be 動詞、関係詞、前置詞、接続詞のような、それ自身大した意味を持たず、文中で内容語にともなって文法的な役割を果たす機能語 (function word) には、文強勢は置かれない。例えば, I WENT to the CONCERT with my FREIEND. のようにである。

## (7) リズム

英語のリズムは、強勢を持つ音節と持たない音節が組みになって繰り返すことによって生まれる強勢拍リズム (stress-timed rhythm) と呼ばれる。1 つの文強勢から次の文強勢までの時間が、間にある弱音節の数に関わらずほぼ一定という特徴がある。そのため各音節の長さは一定にはならず、特に弱音節は弱く短くなる。

次の例文ではいずれも文強勢は3カ所に置かれ、その間隔はほぼ同じように発音されるので、c.では音節数が多い分、強勢のない部分は短く発音される。

- a. Cats eat mice.
- b. The cats have eaten the mice.
- c. The cats will have eaten the mice.

#### 【参考文献】

- 竹林滋 (1996). 『英語音声学』, 研究社出版.
- 田中伸一 (2005). 『アクセントとリズム』, 研究社出版.
- 服部範子 (2012). 『入門英語音声学』, 研究社出版.
- 栢矢好弘 (1976). 『英語音声学』, こびあん書房.
- 安井泉 (1992). 現代の英語学シリーズ『音声学』, 開拓社.

## 第5章 形態論

### 5.1 はじめに

本章と次章は、言語学における形態論 (morphology) と統語論 (syntax) と呼ばれる分野についてである。ふつう、文法とは、この2分野を指して使われることが多い。

言語を話す人は誰でも膨大な数の単語を知っている。単語が言語の最も基本的な単位の1つであるということは周知のことであろう。単語は音と意味の恣意的なつながりであるので、単語を知っているということは、当然その音と意味を知っているということになる。

その他に、単語について私たちはどんな知識をもっているのか。例えば、**break** という単語の場合を考えてみる。**break** の品詞は動詞であり、**I broke the vase.**や**The vase broke.**の両方が言えるので、自動詞・他動詞両方の使い方がある。**break** には**breaker**, **breakable** などの関連語があり、**breakdown**, **breakfast** などの語にも **break** が入っている。このような形態についての知識を私たちは知っているのである。

### 5.2 形態素

単語が表わす意味には単純なものから複雑なものまである。例えば、**man** という語には

「人」の意味がある。説明するのは難しいが、直感的に言えば単純な意味であろう。では gentleman はどうか。これは man に、gentle という語がもう 1 つ加わってできているので gentle が表わす意味が増える分だけ man よりは複雑だといえる。gentlemanly になると gentleman の上にさらに形容詞を作る -ly が加わってもっと複雑になる。意味的に複雑な語はこのように細かい部分に分割することができ、それぞれの部分が何らかの意味をもつ。gentle には「穏やかな」、man には「人」、-ly には「～らしい」というそれぞれの意味がある。この意味をもつ細かい部分のことを形態素 (morpheme) という。

形態素は音と意味の恣意的なつながりの最小単位であるので、それ以上に分割すると、単なる音素のつながりになってしまい、何の意味ももたなくなる。man を m+a+n と分けると「人」の意味はなくなってしまうことで明らかだろう。

### 5.3 形態素の種類

いくつかの単語を挙げ、それを形態素に分割してみる。a. は 1 つの単語が 1 つの形態素からなるもの。b. は 2 つの形態素からなるもの。c. は 3 つ、d. は 4 つ以上となっている。

- a. man, cat, love, grammar, happy, accept, quite
- b. cats (cat+s), lovely (love+ly), unhappy (un+happy), breakfast (break+fast)
- c. unhappiness (un+happy+ness), acceptability (accept+ able+ ity)
- d. unacceptability (un+accept+able+ity), internationalization (inter+nation+al+ize+ation)

上記の例でみると、形態素の中には a. の欄にあるもののように単独で単語として成立する者と、そうでないもの (-s, -ly, un-) があることがわかる。単独で単語として使える形態素を自由形態素 (free morpheme) といひ、単語として成立しないものを拘束形態素 (bound morpheme) という。拘束形態素は、他の形態素に付加されてはじめて単語を形成することができる。

### 5.4 接辞

拘束形態素の中で接辞 (affix) と呼ばれるものがある。接辞には接頭辞 (prefix)、接尾辞 (suffix)、挿入辞 (infix) の 3 種類がある。接頭辞は他の形態素の前に付加するもので unhappy の un- や reprint の re- などがある。接尾辞は他の形態素の後に付加するもので

cats の *-s* や lovely の *-ly* などがある。挿入辞は他の形態素の中に挿入するものであるが、特殊なものを除いては英語にはこの例はない。

拘束形態素の中にはこの他に数は少ないが、cranberry の *cran-* や receive の *-ceive* などのように、接辞ではないが他の形態素に付加されないと意味をもたず使用できないものもある。また省略形も拘束形態素と言え、will の省略形である *'ll* や have の *'ve* などである。

## 5.5 屈折接辞と派生接辞

機能によって接辞を屈折接辞 (inflectional affix) と派生接辞 (derivational affix) とに分けることもある。屈折接辞は、英語ではすべて接尾辞であるので、屈折語尾 (inflectional ending) と呼ばれる。この接辞は名詞・動詞・形容詞の語形変化を受け持つもので、名詞の複数形の *-s*、所有格の *'s*、動詞の3人称単数現在の *-s*、進行形の *-ing*、過去形の *-ed*、過去分詞の *-en*、そして形容詞の比較の *-er* と *-est* がある。

派生接辞は接頭辞・接尾辞ともに多数ある。屈折接辞は、付加された語は、語形が変わり文法機能が変わるのみで別語にはならないが、派生接辞は付加されると語の意味が変わり、別語になる。また、付加された語の品詞を変えるものと変えないものもある。そして、派生接辞は1つの語に2つ以上重ねて付加することができるが、屈折接辞は英語の場合1つだけであり、一度それが付加されるとそれ以上派生接辞付加することはない。したがって、reprints はまず print に *re-* が付加して reprint になり、それに動詞語尾の *-s* が付加したものであり、prints に *re-* が付加したものではない。

## 5.6 語形成

言語の語彙は常に変化している。新しい語ができてくる一方で、もはや使われなくなり死語になっていくものもある。新語の作られ方には規則がある。

### (1) 派生

基となる語 (語基、基体 (base) などと呼ばれる) に1つ以上の派生接辞を付加して新語を作ることができる。派生接辞の中には生産的なものがあり、多くの語に自由に付加して新語を作る。そのような派生接辞の1つが acceptable などの *-able* である。adaptable, breakable, payable のように *-able* は多くの動詞に付加するが、どんな動詞でもよいということではない。*-able* の付加による形容詞の生成はいくつかの形態規則 (morphological rule) に従っている。それらは、1つは音の変化を受ける、一部の自動詞を除いて、他動詞

にもっばら付加する、「～されることができる」という意味の変化を受けるのである。このような規則に従って新語が造られるのである。

## (2) 複合

2 つ以上の単語を組み合わせて 1 つの単語にすることを複合 (compounding) と呼び、出来た語を複合語 (compound) と呼ぶ。英語には非常に多彩な複合語があり、品詞にもいろいろいな組み合わせがある。a.は複合名詞, b.は複合形容, c.は複合動詞, d.はその他である。

- a. rainbow, blackboard, onlooker, housekeeping, falling star
- b. waterproof, bitter sweet, homemade, hardworking
- c. overflow, upgrade, sleepwalk
- d. however, yourself, because of, mother-of-pearl, master of ceremonies

複合語の表記は、2 語 (以上) で続けて書いたり、ハイフンでつないだりしたものが多いが、分けて書くものもある。一般的な特徴は、多くの複合語にはその意味の中心を成し全体の品詞を決定する構成語がある。これを主要語 (head word) と呼び、ふつう右端の語が担う。blackboard は black に第 1 強勢があるように複合名詞は前の語に強勢があるという発音の特徴があり、looking glass が「のぞいているガラス」でないように、全体の意味も構成語の意味の単なる和にはならないという意味上の特徴がある。

## (3) その他

その他の語形成の方法には、以下のようなものがある。a.は頭文字語 (acronym), b.は逆性 (back formation), c.は省略 (abbreviation), d.は混成 (blending), e.は名前や商標から一般化したものである。頭文字語は何語かのイニシャルを取って 1 つの単語にしたもの。逆性はもともとある語尾を接辞がついたものと勘違いして、これを取り去って新語を作ること。省略は長い語の一部を省略すること。混成は 2 つの語の一部を切り取り、それを複合することである。

- a. NASA (National Aeronautics and Space Administration), radar (radio detecting and ranging)
- b. editor → edit, pease → pea, typewriter → typewrite
- c. doc (tor), exam (ination), (omni) bus, (tele) phone
- d. smog (smoke+fog), brunch (breakfast+lunch), motel (motor+hotel)
- e. sandwich, robot, jumbo, Xerox



## 【参考文献】

- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002). 『語のしくみと語形成』 (英語学モノグラフシリーズ 16), 研究社出版.
- 大石強 (1989). 『形態論』, 開拓社 (現代の英語学シリーズ 4).
- 竝木崇康 (1985). 『語形成』 (新英文法選書 2), 大修館書店.

## 第6章 統語論

### 6.1 文法とは何か

新しい表現を作ったり, 初めて聞く表現を理解することができるのは, そのようなことを可能にしている何らかの知識または能力があるからであろう。この知識または能力が文法である。

### 6.2 統語知識

ある言語の単語をいくらたくさん知っていても統語知識がなければ言語を使用することはできない。我々はこの知識を母語については, ことばを覚えるにつれ無意識の内に身に着けている。それは言語的直観といえる。例えば, 以下の文の内どれが文になっているか否かを直感的に判断できる。

- a. 隣の猫が私の金魚を食べてしまった。
- b. 隣が猫を私を金魚に食べてしまった。
- c. 隣の家が私の絶望を食べてしまった。

b.の文が日本語の文と言えないことはすぐに判断がつく。c.の文は意味的におかしいが, もし特殊な文脈を作れば意味がとれる場合もある。a.とc.の文は日本語の統語規則にかなった文であり, 文法的 (grammatical sentence) な文と呼ばれる。それに対して, b.の文は文法的ではなく, 非文法的あるいは非文 (ungrammatical sentence) である。言語使用者は, このような文法性 (grammaticality) の判断を自然にできるのである。

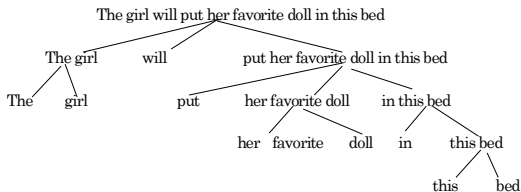
### 6.3 文の構造

統語論で扱うのは主として文のレベルである。文がどのように内部構造をもっているかを明らかにするのが目的になる。英語の内部構造を考える際に、3つの側面から考えるのがよい。

1つは左から右へ単語が並ぶ順序、すなわち語順 (word order) である。基本的な語順が言語によって決まっていることは、外国語を学習する人ならだれでも知っているであろう。日本語は主語・目的語・動詞、英語は主語・動詞・目的語の基本語順を取る。英語は日本語のように助詞がないので、主語・目的語などの文法関係は語順のみで表される。

文における単語と単語との関係では、文は単語を単に正しい語順に従って均等に並べるだけでなく、単語のまとまりに区切って文を理解している。例えば、The girl will put her favorite doll in this bed. の文では2語で1つのまとまりを成している単語がある。それをかっこに入れてみると[The girl] will put her favorite doll in [this bed]. のようになる。

他語のまとまりはこれらだけでなく、her favorite doll は3語でまとまっており、this bed はin とともに in this bed と、1つの大きなまとまりとなる。このような単語のかたまりを括弧でくくっていく代わりに「枝分かかれ図 (tree diagram)」で表すこともできる。



単語あるいは単語列の部分はそれぞれ1つのまとまった単位を表わしている。この単位のことを構成素 (constituent) という。文というのは、表面的には単語の連なりであるが、実際は、このように大小さまざまな構成素が階層的に積み重ねられた構造をもっていると考えられている。

構成素は同じ統語的特性をもったもののグループに分類でき、同じグループ内の構成素同士は互いに入れ替えても文の文法性を損なうことはない。このようなグループのことを統語範疇 (syntactic category) と呼ぶ。上記の枝分かかれ図において、枝先には1つ1つの

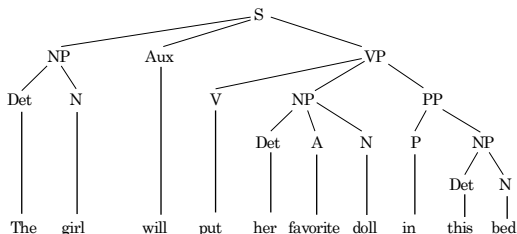
単語がある。これらはいくつかの語彙範疇 (lexical category) に分類される。これらは従来の品詞にあたるもので、girl, doll, bed は名詞 (noun), the は冠詞 (article) であるが同じような働きをする her, this と合わせて限定詞 (determiner) という。その他に動詞 (verb) の put, 助動詞 (auxiliary verb) の will などがある。

次に、1 段上がつて、the girl, her favorite doll, this bed であるが、これらの名詞とその修飾語句からできていて、全体で1つの名詞のようにふるまう (例えば、Jane などで置き換えることができる) ので、名詞句 (Noun Phrase) と呼ばれる。in this bed は in という前置詞に this bed という名詞句がついたものであり、このような構成素を前置詞句 (Prepositional Phrase) という。動詞句は動詞 put とその目的語になる her favorite do, そして修飾語にあたる前置詞句からなる。これらは句 (phrase) を構成しているので、句範疇 (phrase category) という。句範疇は中心となる主要語 (head word) をもち、尾の主要語の品詞による名称がついている。前置詞句以外は主要語のみで句を成すこともできる。

最後に一番上の文 (sentence) は、主部になる主語の名詞句、そして述部になる助動詞と動詞句からなる。したがって、The boys who believe John is an idiot are stupid の文において、John is an idiot や who believe John is an idiot の従来は節 (clause) と呼ばれてきたものも文の範疇に入る。これらを埋め込み文 (embedded sentence) と呼び、それに対して埋め込み文を含む全体の文を母型文 (matrix sentence) と呼んで区別する。

#### 6.4 句構造標識

上記の枝分かれ図を統語範疇を使って書き直すと次のようになる。



この図のように統語範疇を明示した枝分かかれ図を句構造標識 (P-marker: phrase marker) と呼ぶ。文の構造を句構造標識で表すことによって、語順、構成素、統語範疇という3つの側面を一度に示すことができる。

## 6.5 句構造規則

基本的な句構造標識を作り出す規則は、句構造規則 (phrase structure rule) と呼ばれ、次のようなものがある。

- a. S       $\longrightarrow$  NP Aux VP
- b. NP      $\longrightarrow$  Det N
- c. VP      $\longrightarrow$  V NP PP
- d. PP      $\longrightarrow$  P NP

上記の式の意味は、矢印の左側の構成素は右側の構成素で書き換えられる、あるいは展開できるということである。したがって、句構造標識では、上から下へと構成素を展開しながら句構造標識を作っていくことになる。この作業を、それ以上書き換えられる個性素がなくなるまで、すなわちすべての構成素が語彙範疇によって占められるようになるまで続けていく。

文法には統語規則のみでなく、語彙の情報も含まれていなければならない。それが語彙目録 (lexicon)、すなわち辞書であり、中にはその言語の語彙項目 (lexical entry)、すなわち単語が、それぞれの音声上、統語上、意味上の情報とともにすべてのリストになっていると考える。そこには各単語の統語範疇もついているので、句構造規則により生成された枝分かかれ図の語彙範疇に合った単語を挿入すればよいことになる。

英語の NP には John のように Det がいないものもあるし、VP にはいつも NP や PP がついているわけでもない。これらは任意の (optional) 要素である。句構造規則ではこのような任意の要素をカッコに入れて表す。

- a. NP       $\longrightarrow$  (Det) N
- b. VP       $\longrightarrow$  V (NP) (PP)

動詞はその後ろに何も取らない自動詞、そして目的語を取る他動詞に分かれ、他動詞の

中でも love などは1つの目的語, give などは2つの目的語, put などは目的語と修飾語, というように要求する要素の違いで分類される。この情報は語彙目録に記され, 語彙挿入の時点で, 出来上がった構造に合う動詞を選ぶことになる。

## 6.6 変形

変形生成文法では, 表面に現れてこない文の内部構造, すなわち深層構造 (deep structure) と, それが表層構造 (surface structure) へ至る過程を明らかにしようとした。

深層構造からは, 変形という操作をへて, 具体的な表層構造が導かれる。変形は, ある要素を削除, 付加, 移動, 代入したりして, 構造を別のものに変えていくことである。つまり変形は, どのような構造記述 (SD: structural description) に適用されて, どのような構造変化を起こすのかを定式化した規則である。構造記述は, 変形が適用できる条件を表わし, その条件が合えば, 変形すなわち記号の操作が可能となり, その結果, 構造変化 (SC: structural change) が起こる。例えば, 受動変形 (passive transformation) は, 任意に適用される規則であるが, 次のように略記される。

受動変形 (任意)

SD: NP-----VP-----NP

1        2        3

SC: 3    be+en 2    by 1

受動変形では, 名詞句の位置が入れ替わり, 動詞句の形が変化し, 1の名詞句は前置詞句とともに使われるのである。

このような変形を考えることで, 表層構造が異なった文に同じ深層構造を設定し, その関係づけをおこなうことができる。同じ深層構造から, 異なる変形操作をへて, 異なる表層構造が導かれると考えるのである。したがって能動文と受動文は, 受動変形がされなかったものと, 適用されたものということになる。

The dog bit the man.

1    2        3

The man was bitten by the dog.

3    be+en 2        1

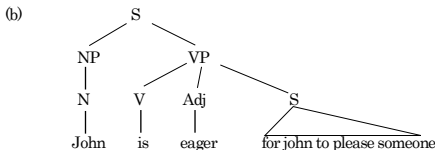
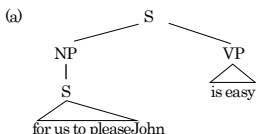
the dog は, 能動文と受動文ではともに論理的な主語すなわち行為者で, また能動文では文

主語でもあるが、受動文では **the man** が文主語である。このような従来の理論では表せなかった関係を、変形を導入することで、能動文から受動文を派生 (derive) させ、関係づけることができるのである。

また逆に、表層的に同じ構造をもつものでも、その深層構造が異なる場合を説明できるようになった。

- a. John is easy to please. (ジョンは喜ばせやすい)  
 b. John is eager to please. (ジョンは(ダレカヲ)喜ばせたがっている)

John は、a. では please の目的語、b. では please の主語である。表層構造ではどちらも文主語の位置であり、このような文法関係は反映されていないが、それぞれの深層構造は異なっている。



この場合は、異なる深層構造から異なる変形をへて、結果的には同じような表層構造に至ったに過ぎない。このように動的に文の構造を捉えることで、文の表面には現れていなかったさまざまな事実が明らかになるのである。

#### 【参考文献】

- 荒木一雄編 (1989). 『現代の英文法』, 研究社出版.  
 有村兼彬 (1993). 『英語統語論』, 研究社出版.

- 太田朗・梶田優 (1974). 『文法論Ⅱ』(英語学大系4), 大修館書店.
- 鈴木英一 (1990). 『統語論』(現代の英語学シリーズ5), 開拓社.
- 田中智之編 (2013). 『統語論』(朝倉日英対照言語シリーズ5), 朝倉書店.
- Chomsky, N. *Syntactic Structures*. (Hague: Mouton, 1957).
- Chomsky, N. *Aspects of the Theory of Syntax*. (Boston: MIT Press, 1965).

## 第7章 意味論

### 7.1 意味と形

言語は大きく分けて二つの要素からなる。一つは「形」である。これは、発音と言ってもよく、文字で書くときは英語ならスペリング、日本語なら漢字とかなである。もう一つは「意味」である。そして形と意味が結び合って意思の伝達が行われるのであるが、「形」の方は、音とか文字とかスペリングという具体的で有限なものであるから把握しやすい。しかし、「意味」の方は、抽象的で無限であり、しかも複雑で把握しがたい。

### 7.2 意味の定義

従来から、言語の「形」の研究は言語学でなされ、「意味」の研究は哲学でなされていた。そして古来より哲学者によってさまざまな意味の定義が行われてきたが、どれも満足なものではないというのが研究者たちの一致した考えである。では意味について何もわかっていないのかというとそういうことではなく、さまざまな研究結果があつて、ある程度はわかっているが、奥行きが深く、しかもどこまでが意味なのか範囲も明確でない。

しかし、ごく常識的なレベルで考えてみると、我々の日常生活では「意味」という言葉は非常に頻繁に使われている。「この言葉の意味は何か」「この文章の意味がよくわからない」「この議論は意味がない」などという。話し手も聞き手もこれらの表現の中で使われている「意味」という語の意味はちゃんとわかっているのである。「この言葉の意味は何か」の意味は辞書に書いてあるような語義のことで、「この文章の意味がよくわからない」の意味は「内容」、「この議論は意味がない」の意味は「意義」と言い換えるのできる意味である。「意味」とよばれるものにはずいぶんさまざまな要素が含まれているのである。このように意味には複雑な諸相があることが容易にわかる。

### 7.3 指示をめぐって

私たちは木を見て、[ki]という。これは、実際に目に見える木を、「木」ということばに置き換えて使っている。このように、ことばという記号を使うとき、記号とその指示するものとの間に、刺激と反応の様な直接的な関係があると主張するのが物理主義と呼ばれる理論である。一方、そのように直接結びつけられるのではなく、イメージ、概念、思想などを經由して指示されると考えるのが心理主義と呼ばれる理論である。ある記号を使う際の連想は、人によって違っている。例えば、木を見て守るべき緑の資源と考えるのか、木材資源と考えるのかなど様々である。ここでは、指示をめぐるいくつかの説を紹介する。

#### (1) フレーゲル

ドイツのフレーゲル (G. Frege) は、記号には、記号が指示するレファレンス (指示対象) と、記号が表わすセンス (意義) があるとする。彼のいうセンスは、指示の仕方を含む心象である。たとえば、「宵の明星 (evening star)」と「明けの明星 (morning star) は、同じ金星を指すが、同じセンスで使われることはない。つまり、明け方の空の美しい星を「明けの明星」と名づけたのであった、その際には宵空の金星とは別の意味づけを行っているので、*I saw the Morning Star last night.* とは言い換えることはできない。

#### (2) ソシュール

ソシュール (Ferdinand de Saussure) は、言語は概念を表わす記号の体系であり、その記号は表わすものと表わされるものとの組み合わせであるとする。すなわち、音声表現が表わす記号表現 (能記) と意味内容が表わされる記号 (所記) ということになる。つまり言語の音声表現が意味内容を表わし、その意味内容が音声形式によって表わされるので、言語は物理的な音声と心理的な意味が表裏一体となったものとなる。しかし、この表わし表わされる関係は、絶対的なものではない。言語が変われば表わし方も違うのは当然であるが、同じ言語社会においては慣習的である。そこで、言語活動 (langage) においては、社会的な約束事としての言語 (langue) と、個人が実際の場で使う言語 (parole) を区別する。ラングには、ある一定時の状態である共時的な面と、時間の流れとともに変化する通時的な面とがある。

#### (3) オグデンとリチャーズ

サッカーのイエローカードは警告、レッドカードは退場を表わしている。このように直接的な指示をするサインとは異なり、言語は間接的な指示をするシンボルであると指摘したのが、オグデン (Charles Kay Ogden) とリチャーズ (Ivor Armstrong Richards) であ



る。シンボルの成り立つ場を，基本的な意味の三角形で表わした。ここでは，象徴と指示物は，思想あるいは指示を経由した間接的な表示関係となり，点線で表記される。言い換えれば，これは語と指示物の関係に意味を経由させる立場をとり入れたもので，つまり，言語は記号の記号というシンボル性をもつのである。

#### 7.4 メタ言語

言語は，言語外の事象だけでなく，言語自体について述べることもある。言語外の事象を指示対象とする日常言語を対象言語 (object language) という。またこの対象言語を指示対象とする高次元の言語をメタ言語 (metalanguage) という。なぜならパラドックスなどのことば遊びでは，わざと相手にレベルを混同させるように使われる。例えば，「この世の真ん中にあるものは何か？」の答えは，メタ言語「この世」の真ん中の文字の「の」である。

#### 7.5 意味素性

man と woman は，大人という点では同じだが，男か女かが違う。boy と girl では，子どもだがやはり男か女かが違う。man と boy では，同じ男でも年齢が違う。girl と woman も同様に，同じ女でも年齢が違う。man と woman の関係に比べると，cock と hen は，人間か否かの違いがあるものの，他は同じである。chicken では，人間の boy や girl のような性別はない。このように考えていくと，これらの語には共通の意味素性 (semantic feature) があるのが分かり，さらにその素性は，+か-かの2項対立で捉えることができる。そこで「人間」「成年」「男性」の素性でまとめると，次のようになる。

	man	Woman	boy	girl	cock	hen	chicken
人間	+	+	+	+	-	-	-
成年	+	+	-	-	+	+	-
男性	+	-	+	-	+	-	±

このように，いくつかの語について部分的に類似している語のどこが違うのかに着目して，意味の成分を分析することができる。語の意味をまるで因数分解するように，弁別的素性 (distinctive feature) でまとめてゆくのである。

## 7.6 選択制限

「おてんば娘」「箱入り娘」「深窓の令嬢」とは言うが、男性には「深窓の令息」などの言い方はしない。これは、「おてんば」「箱入り」「深窓の」という3つの修飾語が、「女性」の意味成分をもつものを被修飾語として選ぶように、一定の制限を持つからだと考えられる。このような、意味と意味との結びつきに関する統語的な情報を、選択制限 (selectional restriction) という。これは、非文法的な語の結びつきを排除する働きをする。

## 7.7 前提

前提はあらかじめ分かっていることである。例えば、his success や the dog のような定表現を使うと、その存在は前提される。また、realize, now, regret などの叙実動詞 (factive verb) は、目的語としての that 節、すなわち補文の内容が真であると話者によって前提される場合にだけ用いられる。

## 7.8 意味の上下関係

シバイヌ、ブルドッグ、コリーは、イヌの種類である。さらに、イヌは、ネコ、ウマなどとともに、より大きなドウブツという種類にまとめられる。この様なより大きな一般的な概念をもつ語を上位語、逆により特定の概念をもつ語を下位語とし、上下関係を設定できる。このような分類方法は、文化人類学や生物学を応用したもので、語と語の階層性が明らかになる。そして、上位語ほど一般性が高くなり、下位語ほど特殊化されるのである。そうなると、上位語には下位語の指示対象がすべて含まれ、下位語には上位語のもつ性質をすべて含む、包摂関係 (inclusion) をもつことになる。したがって、下位語の代わりに上位語は使えるが、その逆は成立しない。例えば、Look at the bulldog. のかわりに Look at the dog. とは言えても、逆は必ずしも言えない。また、bulldog を collie と言い換えることはできない。これは、イヌに対して同じ下位語の関係にあるブルドッグとコリーは、非両立関係にあるためである。

## 7.9 意味変化

語と語との関係は、恣意的なものであると同時に、それぞれの言語のなかで慣習的に使われるものである。意味には多分に心理的、認識的な面があり、時代や社会とともに語の

意味が変化していくことは、ごく自然な現象といえる。例えば、**awfully, terribly**などの強意語は、誇張法として使われているうちに、意味が弱まってきている。また、**ride**はもともと「馬に乗る」という意味であったが、文明の発達と共に「乗物に乗る」という意味になった。このような意味変化の過程は複雑であるが、おもに言語的・歴史的・社会的・心理的要因によると考えられる。

意味の変化には、「意味の拡大」「意味の縮小」「意味の転化」「意味の悪化」「意味の良化」がある。

#### (1) 意味の拡大

**bird**は、古英語では「ひな鳥」であったが、現代英語では、「若い」という意味がなくなって、「鳥」全般を指すようになった。また、**arrive**はもともと海洋用語で「海に着く」であったのが、一般的な「着く」の意味に使われるようになった。このように語の意味が一般化 (**generalization**) されることを、意味の拡大という。

#### (2) 意味の縮小

**corn**は、もともと「穀物」全般を指していたのが、各土地の主要作物、例えば、イギリスでは小麦、アメリカではトウモロコシを指すようになった。このように意味が特殊化 (**specification**) されることを、意味の縮小という。他の例として、**deer**は「動物」、**hound**は「犬」、**poison**は「飲み物」を元来は意味していた。

#### (3) 意味の転化

中世では、ロザリオの玉を繰り返しながら祈りをあげた。数珠のように玉の連なったロザリオの玉で、祈り (**bead**) の回数を数えるのである。そこで、**bead**は、「祈り」のかわりに、目に見える「ロザリオ」の意味に転用されるようになった。他の例として、**accident**は、「身に起こったこと」から「偶然」「事故」に、**chance**は「さいの落ち方」から「運命」「好機」に転化した。

#### (4) 意味の悪化

**silly**は、古英語での「幸福な」という意味が、婉曲語法の「おめでたい」を経て、中英語の頃には「天真らんまん、現実無視」という意味に変化し、現代英語で「愚かな」という意味になった。もともと、忌避される語を婉曲に言い換えていたのが、隠そうとした意味と直接結びつき、悪い意味が固定化してしまったものである。他の例として、**cunning**は「器用な」が「ずるい」や**maid**は「少女」が「小間使い」がある。

## (5) 意味の良化

nice の原義は、「無知な」であるが、「潔癖な、細かいところまで行き届く」を経て、今日の良い意味をもつようになった。このように良い意味に転化することを「意味の良化」や「意味の向上」という。他の例として、fond は「愚かみな」が「愛情深い」、minister は「召使」が「大臣」がある。

### 【参考文献】

- 池上嘉彦編 (1985). 『意味論・文体論』(英語学コース4), 大修館書店.  
池上嘉彦著 (1975). 『意味論: 意味構造の分析と記述』, 大修館書店.  
児玉徳美 (2013). 『ことばと意味』, 開拓社.  
杉本孝司 (1998). 『形式意味論』(日英語対照による英語学シリーズ5), くろしお出版.  
中野弘三編 (2012). 『意味論』(朝倉日英対照言語シリーズ6), 朝倉書店.  
吉川洋・友繁義典 (2008). 『英語の意味とニュアンス: 入門講座』, 大修館書店.  
米山三明, 加賀信広 (2001). 『語の意味と意味役割』(英語学モノグラフシリーズ17), 研究社出版.

## 第8章 語用論

### 8.1 語用論とは何か

話し手は発話するときに、必ずしも文字通りの意味 (literal meaning) を伝えているわけではない。それ以上のことを伝えたり、ときにはそれとは逆のことを伝えることもある。そこで聞き手も、話し手が何を伝えたいのかという意図をくんで、発話の意味解釈を行う。このように会話の場に参加している話し手と聞き手の間の、ことばの意味解釈におけるメカニズムを研究の対象とするのが語用論である。

### 8.2 発話とは何か

語用論では、研究対象となる文を発話という。では、発話とは何か。発話とは実際の言語使用で用いられたもので、その意味は状況に依存する。例えば、I was here yesterday. の I, here, yesterday などは、だれが、どこで、いつ発話したかという状況が明らかになら

なければ、特定できない。このような語を直示 (deixis) というが、これは発話の状況との関連においてのみ理解される典型的なものである。発話は、話し手の意図とさらに聞き手の解釈に従って、その意味がさまざまに変化する。

### 8.3 発話が伝える意味

例えば、It's rather hot in here. では、文字通りの意味は「ここはちょっと暑い」となる。これを発話として考えると、その意味はこの発話の行われる状況と話し手の意図、聞き手の解釈によってさまざまになる。

部屋の窓が閉まっていて、聞き手は窓際に立っている。話し手が汗をかきながら、部屋に入ってくる。そのとき聞き手に向かって、この発話を言ったとしよう。おそらく聞き手はすぐに窓を開けるだろう。この場合、この発話は、「この部屋は暑いですね」という意味をふまえて、「窓を開けてください」という相手に「要請」をしていることになる。また、仮にこの部屋に聞き手が汗をかきながら入ってきた状況で、話し手がこの発話を言ったとしたら、おそらく話し手は、窓を開けながら、発話するであろう。この場合には、発話することにより「窓を開けましょうか」と相手に「提案」していることになる。

さらに、話し手が聞き手に部屋が暑いという状況を単に「主張」している場合も考えられるし、また別の部屋に移動しようと「勧誘」している場合も考えられる。

### 8.4 発話行為

オースティン (J. L. Austin) は、発話行為の基本的な側面を3つに区分している。発話行為 (locutionary act)、発語内行為 (illocutionary act)、発語媒介行為 (perlocutionary act) である。

発話行為は、単に言語の音、語、句や文などを発する行為、発語内行為は、発話行為をしながら何かを遂行する行為、発語媒介行為は、発話行為と発語内行為によって媒介され、その結果としてでてくる行為を指す。

例えば、A が B に向かって、I will be here tomorrow. と言った時に、まず A は B にこの文を発話する行為をしたことになる。これが発話行為である。次に A は B にこの文を発話することにより、聞き手に「約束」をしたとすると、この「約束」が発語内行為となる。つまり、「約束」ということは、発話行為のなかに存在する行為というわけである。次に A は B に「約束」して B を安心させたとすると、この安心させるという行為は、発話行為と

発語内行為によって媒介され、その結果として出てくる行為になる。これを発語媒介行為という。この3つのなかで、最も重要なものは発語内行為であり、「約束」「質問」「命令」「勧誘」「依頼」「主張」などが考えられる。

#### 8.5 間接発語行為

発語内行為の条件は、聞き手が話し手の発語の意図をくみ、話し手が陳述しているのか、約束しているのか、命令しているのかその行為の適切な解釈をすることである。当然聞き手の推論する力が求められることになるが、この過程には、直接発語行為と間接発語行為がある。

直接発語行為は、直接的に行われる発語行為である。例えば、「依頼」という発語内行為であれば、発語行為が、*I request that you open the window for me.*のような遂行動詞の *request* を用いるや *Please open the window for me.*のような命令文を用いているものであれば、文字通りの解釈そのままに、「依頼」を遂行していることになる。

ところがこの「依頼」は、*Can you open the window for me?*のように相手の能力を「質問」するという疑問文形式で遂行することもできる。このような間接的な発語行為を間接発語行為という。

#### 8.6 協調の原則

グライス (Herbert Paul Grice) は、会話は一定の方向をもった話し手と聞き手の協力的な行為であり、両者とも「協調の原則 (cooperative principle)」を守って発話が行われていると考えた。「あなたが関わっている会話では、発話が生じる段階で、その会話の目的や方向にそったものにしなさい」という原則が、会話に関する規則のなかで最も基本的な、かつ一般的なものであるとした。

グライスは、4つの会話の公理 (cooperative maxims) を設け、より具体的な行動の基準を示している。

##### ① 量の公理

- a. 必要とされるだけの情報量を伝えなさい
- b. 必要とされる以上の情報量を伝えないように

##### ② 質の公理

- a. 偽りであると思っていることを言わないように

b. 証拠がないことは言わないように

③ 関連性の公理

a. 関係のあることを述べなさい

④ 様態の公理

a. 不明瞭な表現を避けなさい

b. あいまいさを避けなさい

c. 簡潔に言いなさい

d. 順序立てて言いなさい

しかし、たとえある発話が上記の公理のうちのどれかを違反しているように見えても、聞き手は、協調の原則は守られているものとみなし、その違反は見かけだけであると考え、そこで話し手の意図を推論することになる。間接発話行為の場合でも同様に、聞き手は話し手の意図を推論し、その発話の含意を引き出す。以下の例を見てみよう。

A: What's your name?

B: Do you have a pen?

B の発話は、A の質問に対する直接的な答えになっていないので、関連性の公理に違反している。しかし、B は協調の原則は守っていると考えられることから、B の発話の含意（例えば、書いてあげる）を A が推論することにより、関連性が保たれることになる。

## 8.7 含意

含意 (implicature) には 3 種類のものが考えられる。論理的含意、慣習的含意、会話の含意である。論理的含意とは、語自体に内在するもので、語の意味の一部分と考えられるものである。慣習的含意は、語句の慣習的な意味から含意が決定される場合をいう。

会話の含意は文そのものの言語的意味には含まれていない言外の意味であり、その場の状況のなかで推論することで出てくるものである。次の例を見てみよう。John is indeed a good husband. この文が文字通りの意味なのか、反語として使われているのかを決めるのは、論理でも慣習でもなく、状況である。反語の場合は、まず聞き手は、話し手が協調の原則を守っていると考える。さらに John が過去において話し手を裏切った事実を思い出す。そこでこの文を文字通りの意味で取るとおかしいと考え、この文をアイロニーと解釈するのである。この会話の含意は、会話の当事者たちが特定の状況でおこなう推論によって得ら

れるが、これが可能となるためには、会話をする者が根本的には協調の原則を守り、会話の公理に従っているという前提が必要である。

#### 8.8 丁寧さの原則

G. リーチ (Geoffrey Neil Leech) は、グライスの協調の原則に、「丁寧さの原則 (politeness principle)」を加えた。丁寧さの原則によると、人は常に対人関係に注意を払い、相手に対して失礼のないようにことばを使用するという。これには 6 つの公理が含まれる。すなわち、気配りの公理、寛大性の公理、是認の公理、慎ましさの公理、同意の公理、共感の公理である。

気配りの公理「相手に対する負担を最小限に、利益を最大限に」

寛大性の公理「自分に対する利益を最小限に、負担を最大限に」

是認の公理「相手に対する非難を最小限に、賞賛を最大限に」

慎ましさの公理「自分に対する賞賛を最小限に、非難を最大限に」

同意の公理「相手に対する意見の対立を最小限に、意見の一致を最大限に」

共感の公理「相手に対する感情の不一致を最小限に、共感を最大限に」

寛大性の公理は、気配りの公理とほとんど同じ働きをし、是認の公理と慎ましさの公理、同意の公理と共感の公理は、各々対になっている。

このなかで、気配りの公理が最も重要なものといわれ、基本的には相手に依頼したり要求したりするときの、発話の対人的な機能に関係してくる。このことにおいて、リーチは 2 つの尺度をたてた。1 つは、話し手・聞き手にとって、発話の遂行によって実現される行為が、負担の方向に働くか、利益の方向に働くかという、負担・利益の尺度である。2 つめは、その行為の実現が、話し手・聞き手の選択にどの程度委ねられているかという作度である。ある行為を聞き手に依頼したり、要求するとき、それが聞き手にとっての損得によって、丁寧さの程度が決まってくる。以下の例を見てみよう。

a. Answer the phone.

b. Will you answer the phone?

c. Could you possibly answer the phone?

上記の例では、後に行くほど間接性の高い表現となっており、聞き手の選択の余地が広



がり、丁寧さの程度が増している。このように聞き手に負担のかかることを依頼するとき、聞き手の選択の幅を増やすことによって、丁寧さの程度を高めてゆくことができる。

#### 【参考文献】

- 井出祥子 (2006). 『わかまへの語用論』, 大修館書店.  
今井邦彦 (2001). 『語用論への招待』, 大修館書店.  
オースティン, J.L. (坂本百大訳) (1978). 『言語と行為』, 大修館書店.  
小泉保編 (2001). 『入門語用論研究: 理論と応用』, 研究社出版.  
滝浦真人 (2008). 『ポライトネス入門』, 研究社出版.  
田中廣明 (1998). 『語法と語用論の接点』, 開拓社.  
毛利可信 (1990). 『英語の語用論』, 大修館書店.  
レヴィンソン, S.C. (安井稔・奥田夏子訳) (1990). 『英語語用論』, 研究社出版.  
リーチ, G. (池上嘉彦・河上誓作訳) (1983). 『語用論』, 紀伊國屋書店.  
Grice, H.P. "Logic and Conversation," *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. Eds. P.Cole and J.L. Morgan (New York: Academic Press, 1975)

## 第9章 談話のしくみ

### 9.1 はじめに

語用論では、話し手がことばをどのように使って聞き手に分からせようとしているか、聞き手はどのようにして話し手が伝えようとしていることを解釈しているか、どのようにして相手のことばの真意をくみとっているか、また話し手と聞き手はどのような基本的なルールを守りながら、どのようにして会話の複雑な営みに参加しているのかなどを考えてきた。本章では、今度は文の枠を超えて、文と文がどのようにつながって筋の通った一続きの文章が生み出されるかを中心に考える。そして、文の枠を超えた大きな言語単位を、談話 (discourse) という。

### 9.2 談話とは

「談話」とは、通常では、「はなしをすること、くつろいで会話を交わすこと」や「ある

事項についての非公式的な意見」と定義されている。しかし、これらの定義は、言語学における談話という専門分野においては該当しない。では、言語学における「談話」とはどのように定義されるのか。『大辞林』(第2版)では、以下のように定義されている。

《言》[discourse] 文よりも大きい言語単位で、あるまとまりをもって展開した文の集合。話されたもの、書かれたものの両者を含む。テキスト。

談話には、「文よりも大きい単位」「言語使用」「テキスト」という要素がある。「文よりも大きい単位」とは、より専門的には「文または節よりも上のレベルの言語単位」と定義づけられる。例えば、以下の会話で説明する。

Mike: Where is my car key?

Mary: On the television set.

この場合、Maryの台詞にはMikeの“Your car key is”という文の一部が省略されていることが分かる。Mikeの台詞に含まれる情報がMaryの情報の前提になっているのである。すなわち、Mikeの情報があつての、Maryの情報が成立するということを表わしている。こうして「文の文法」の限界を認識すると、新たな文よりも大きい単位を設けて、文の前後関係が語句の用法にどのような影響をもたらすのかを明らかにしないといけなくなった。その文を超えた言語単位として「談話(discourse)」という単位を設けることになったのである。「談話」を分析する際には、先ほどの「省略」「前提」を、新たに「談話の文法」として分析に用いられることになった。この談話文法には、他に「照応」「くりかえし」「つなぎ語」「隣接対」といった用語がある。

### 9.3 談話の規則

文としては適格であっても、談話のなかで捉えたとき、不適格になる場合がある。これは、前後の文との続き方が、なめらかでなかったり、談話の流れを阻止していることから起きてくるという。このことは、談話で文を捉えたとき、それらの文を結びつけるなんらかの規則やきまりがあるということを示している。談話を構成するそれぞれの文は、このような規則やきまりに従って組立てられないと、談話全体として不適格になるということである。

- (1) The door was already open. Fred opened it.
- (2) The door was already open. It was opened by Fred.

(1)と(2)は、「文の文法」では、まったく問題はない。それらの違いは、それぞれの後半の文が能動態か受動態かというだけである。ところが談話の文法で考えたとき、ふつうは(2)の方が好まれる。この場合どのような規則がはたらいたのだろうか。

#### 9.4 情報構造

談話が円滑に流れ、伝達を効果的にするためには、一般的に話し手と聞き手の間で、すでに既知になっている情報を基にして、それに聞き手にとっての新しい情報を話し手が付け加えていくといった方法がとられる。9.3の例文において、前半の文から、誰かが開けたことは、既知情報になる。例文(2)の後半の文の *it* は、前半の文の *the door* を受けているのであるから、*It was opened* の部分は、この既知情報を担っていることになる。したがって、まずこれを先行させ、そのあとに新しい情報である *Fred* を続けていることになる。つまり、受動態をとることにより、前文からの情報的なつながりがなめらかになっているわけである。

このように、談話の構造を決定する要因として、まず、情報を聞き手にとってすでに知っていることがらであるか、それとも全く新しいことがらであるか、が考えられる。次に、情報がどの程度重要であるかによって配列法が決定される。さらに、伝えられる内容を明確にするため、また聞き手の理解がしやすくなるように、話し手は何について話をしているのかをはっきりと示し、それについて述べていくという構造がとられる。

#### 9.5 新情報と旧情報

情報の中で、聞き手の意識にすでにあるであろうと話し手が判断している情報を、旧情報 (*old information*) という。また聞き手の意識にはないであろうと考えられる情報を、新情報 (*new information*) という。情報のこの新旧はあくまでも話し手からの推測によるものである。

旧情報となる内容には、以下のようなものが含まれる。

- (1) 話し手と聞き手が同じ場で共に経験したり知覚している事柄
- (2) 先行する文脈にすでに登場している事柄

### (3) 個々のメンバーではなく範疇全体を総称する場合

音声的には、旧情報となっている要素は、新情報の要素に比べて強勢が弱く、ピッチも低くなることが多い。

統語的には、定冠詞を伴った名詞、**this** や **that** の指示代名詞、人称代名詞などの指示表現や、一度すでに前の文脈に出てきたものを別の表現で置き換えた代用表現などは、旧情報を担うことができる。ただし、話し手と聞き手が間違いなく同定できるようなものを指示している場合には、定冠詞が付与されるので、定冠詞がついているからといって常に旧情報というわけではない。旧情報は文の中で頭の方に現われ、新情報は逆に後方に現われる。つまり、一つの文の情報構造は、旧情報から新情報へ向かって流れていく。これを「旧情報から新情報への原則」という。

#### 9.6 前提と焦点

ある文が発話されたとき、もっとも重要な情報を担う部分を焦点 (focus) という。その焦点部分を変数 **x** で置き換えたものが、前提になる。つまり、話し手と聞き手の間で了解されている既知命題の内容が前提であり、その命題の中の未知数を特定化した部分が焦点ということになる。

- (1) What did she do?
- (2) She opened the door.

(1)に対する答えが(2)であるとすると、(2)でもっとも重要な情報を伝えている部分は **opened the door** であり、これが焦点ということになる。そしてこれを **x** で置き換えた、**She did x**。すなわち **She did something** が前提となる。

この前提と焦点を情報の新旧から考えてみると、前提は、不定代名詞などにあたる部分を除いて、旧情報からなる。ところが焦点の方は、常に新情報とは限らない。

- (3) He took Jane and Suzie to the zoo, and Suzie seemed to enjoy it very much.
- (4) No, Jane enjoyed it very much.

(3)に対して(4)と言いつ返したとすると、このときの焦点は **Jane** であるが、これは先行文に出ている名前、既知情報であり、旧情報ということになる。

前提は旧情報であるので、ふつう文の前方に出てくる。一方、焦点は通常文末あるいは文末に近い位置に現われる。それ以外の位置に現われるときには、焦点であることを示すために強調強勢 (emphatic stress) を伴うのである。

## 9.6 主題と題述

文がこれから何について述べるかを予告する役割を、主題 (theme) という。それについて述べる部分を題述 (rheme) という。主題は予告の役割を果たしているのので、文の先頭の位置に生じることになる。主題となる要素は旧情報に限られ、題述の方は新情報を伝えることが多い。

ふつうは、文の主語が主題に役割を担っている。しかし例えば、**What did she do?** という疑問文では、文頭の部分の **What** が、話し手が最も知りたいたいところであり、聞き手の注意を引きつける主題である。情報構造、前提と焦点、主題と題述においては、先ほどの **What did she do?** は、**What** が新情報、焦点、主題であり、**did she do?** が旧情報、前提、題述ということになる。

## 9.7 結束性

下記の複数の文からなる談話を分析したとき、その構造には、単一の文における構造とは異なる要因が含まれていることに気づく。

Tom instantly fell flat on his back, and lay completely silent; and Nancy was a little surprised at what she had done, and went around the room to see if she could find any water to throw over him. But she could find only a bottle of whisky, and when she got back with it she found he had waken himself.

同じ人あるいは物を指すのに、Tom/ his/ him/ he, Nancy/ she/ she/ she/ she, a bottle of whisky/ it というように、代名詞の使用によって、文のつながりが作られている。語彙的には、**fell flat on his back/lay completely silent** で意味的に共通点をもつ語によってつながっている。接続詞の **and, But** を使用することによって、先行するものと後続するものとの関係を明らかにしている。時制は過去形、過去完了形が使われて、出来事間のつながりが作り出されている。

このような文法的なつながりは、先に述べた旧情報が、後続の文に引き継がれていくと

いう流れを保つためのものであり、結束性 (cohesion) と呼ばれる。この結束性には、そのつながり方の程度によって差がみられる。

(1) A: What did Nancy open?

B: She opened the door.

(1) では、A の述べた旧情報である Nancy に照応して、B は She という代名詞でこれを受け、応答する。したがって、この 2 文は代名詞の使用によって、文法的にしっかりと結びつけられており、結束性があるということになる。

(2) A: What did Nancy open?

B: Nancy opened the door.

(2) では、A のことばの中の Nancy を B が繰り返している。A が一度言及したものを再度繰り返すことは結束性を不自然にする。もし B の応答が、結束性を不自然にするという危険をおかしてまで、あることばを繰り返しているのであれば、B は何か特別なことを A に伝えたいという意図があると考えられる。ただし同じような繰り返しでも、旧情報である Nancy を少し言い換えて、That girl などで繰り返すことはよくおこなわれる。

(3) A: What did Nancy open?

B: The door was opened by Nancy.

旧情報は文頭に、新情報は文の後方に置くというのが、流れの原則であった。(3) の場合、A がすでに Nancy のことを言及しているにもかかわらず、これが B の発話の文尾に来ている。そして、A が尋ねている the door という新情報が文頭に来ている。これも 2 文の結束性の不自然な例である。

(4) A: What did Nancy open?

B: Opened the door.

結束性という点からみたととき、A と B の間には、形の上での明白な文法的なつながりはない。したがってこの 2 つの発話間には結束性に問題があるということになる。

## 9.8 一貫性

一つひとつの文は文法的に適切であるし、また文を超えて文法的に適切につながっているにもかかわらず、談話のレベルで考えたとき、談話の流れが損なわれて意味のとりにくい場合がある。これは文が続いているとき、単に文法的に適切につながっていること以外に、他の要因があることを表わしている。これが一貫性 (coherence) と呼ばれるものである。

一貫性は明示的に、具体的にことばに表わされているものではない。聞き手または読み手が、ことばや状況を手がかりにして、自分の知覚や経験を生かして推論をおこない、文と文との間に意味のあるつながりを作り出すのである。したがって、この一貫性は、談話のレベルにおける聞き手の側の問題ということになる。

日常の会話では、話し手の意図がはっきりと言明されていることは少なく、むしろそうでないことのほうが多い。さらに、結束性に不自然さがあるような場合もあるので、この一貫性が重要な機能を果たすことになる。

A: Oh, Tom—you answer the door!

B: I'll study in my room—busy!

A: Oh, Tom, please answer the door!

この会話には、代名詞や接続詞など結束性を示すものはないが、会話は成立している。母と息子はともに相手の意図を考慮に入れながら、この場にあった発語内行為を考えて、それに応答している。A は自分が玄関のチャイムに対応したくないので、B に対応するように依頼する。B はこの発語内行為を受けて、その依頼に応じられない理由、すなわち自分は自室で勉強が忙しいからと言う。A は、B がその理由を言うことによって拒否しているのだということがわかったが、それでも B に依頼する。

このように実際のコミュニケーションの場においては、対話は文法的結束性よりもむしろ、一貫性に頼って成立していることが多い。

## 9.10 スキーマ

全体の意味的まとまりである一貫性を得るために参照される、記憶された知識の構造やパターンをスキーマ (schema) という。また、特に固定的なスキーマをフレーム (frame) と言い、時系列の知識をスクリプト (script) という。例えば、一般に、私たちは都会にい

れば、「レストランのSCRIPT」と「ファーストフードのSCRIPT」が異なっていることは知っており、別々に記憶を貯蔵して生活している。「注文して席に着いた」と「席について注文した」はどちらがどのSCRIPTを参照しているかが普通はわかる。

A: I have a thirteen-year-old daughter.

B: Well, that's all right.

A: I also have a cat.

B: Oh, I'm sorry.

おそらく多くの人は13歳の娘がいることをなぜall rightか、さらに続く会話でなぜ猫が出てくるのか、なぜ謝っているのか、見当がつかないであろう。しかし、これはスキーマとして、Aはアパートを借りようとしている人で、Bは家主、もしくは管理者であるという情報を得られれば、たちどころに一貫性のある会話に見えてくるだろう。13歳の娘がいること（同居すること）はアパートを借りるのに支障はなく、猫がいることは認められないということを言っていると理解するのは、逆に多くの人にとって容易だろう。アパートにはしばしば同居者がおり、動物を飼っても良いアパートと飼ってはいけないアパートがあるということを知っており、それを決めるのは家主、もしくは管理者であることを知っているのだ。そのような世間一般に関する知識もスキーマの一部である。そして、最後のI'm sorry. が「断り」「不許可」の言語行為になることは、間接的なメッセージに関わる知識、ポライトネスに関わる知識もこの際のスキーマに参画していることがわかるだろう。

#### 9.11 談話標識

9.10の例における、WellやOhの要素は、一見、無意識的な問投詞でさほどの意味は持たないように思われるが、これらは「談話標識 (discourse marker)」といい、談話分析に用いられる。Oh, well, and, but, now, y'know, I meanなどは発話者のその時点での知識状態を表わしたり、談話に関するスタンスを表わしたり、交通整理をする働きをしている。

#### 【参考文献】

久野暉 (1978). 『談話の文法』(日本語叢書), 大修館書店.

クールタード, マルコム (石村明市他訳) (1999). 『談話分析を学ぶ人のために』, 世界思想社.



- スタップズ, マイケル (南出康世他訳) (1990). 『談話分析』, 研究社出版.
- 天満美智子 (1994). 『新しい英文読解法』, 岩波ジュニア新書.
- 林宅男 (2008). 『談話分析のアプローチ—理論と実践』, 研究社出版.
- ハリデー, マイケル・R・ハッサン (安藤貞雄他訳) (1997). 『テキストはどのように構成されるか』, ひつじ書房.
- 福地肇 (1985). 『談話の構造』 (新英文法選書第10巻), 大修館書店.
- マッカシー, マイケル (安藤貞雄他訳) (1995). 『語学教師のための談話分析』, 大修館書店.
- メイナード, 泉子・K (1993). 『会話分析』, くろしお出版.

## 第10章 言語と文化

### 10.1 ことばが映す文化

人々の振る舞いは日々の生活の中にあり, そこで用いられている言語は生活の営み方に適合してゆく。その結果, それぞれの言語は, その言語を話す人々の文化を映し出すものと考えられる。

### 10.2 ことばと生活環境

語彙は, 話者たちの生活環境の歴史的背景を映していることが多い。雪が日常的ではない地方に住む人々は, 「雪」という一般的な語に修飾語を組み合わせて, 必要な表現を作り出して対応するが, 1年のうち, 何か月かを雪との付き合いで過ごす人々は, 雪にまつわる様々な呼び名を用いている。

あられ, かざはな, こごめゆき, こなゆき, ささめゆき, ざらめゆき, むねゆき, べたゆき, ぼたんゆき, みぞれ, もちゆき

雪国で実際に使われる際には, 「こごめ」「ざらめ」「べた」のように「雪」を省略して使うこともある。これは, 雪国では雪が生活に密着しており, 改めて明示する必要がないためである。こうしたことばの省略にも文化が反映される。

### 10.3 英語の rice と日本語の「米」

稲作を基盤にした農業が重要な伝統産業である日本では、米を日本語で表すのに「こめ」「いね」「もみ」「ごはん」などの呼び名が使われる。米は、さらに、「はくまい」「げんまい」「しろこめ」「くろこめ」とに分けて呼ばれることがある。これらの語を英語の rice と対比すると以下ようになる。

英語	日本語
rice	稲 (いね)
	粳 (もみ)
	米 (こめ) [白米/黒米]
	ご飯 (ごはん)

英語はすべて rice という 1 語で表現される。「ご飯」は時には、cooked rice や boiled rice が使われることがあるが、誤解がない場合であれば、rice だけで伝えられる。

### 10.4 英語の dish と日本語の「皿」

主食である「ご飯」は、食事一般としても使われ、伝統的な膳を基本とする和食では、各人の碗に盛られる。他の副食物も同様に各人の皿に最初から盛り付けてある。このやり方では、皿の役割が、欧米諸国や中国の料理のように、大皿に盛って出される料理を各人が取り皿に取って食べる場合とは、著しく違ってくる。英語の dish と日本語の「皿」の関係を比べてみる。

	英語	日本語
dish	dish/ platter	皿
	plate	
	saucer	

英語の dish (platter) は、「盛り皿」であり、その性質上、大きかったり深めであったりする。plate は各自の「取り皿」で、小さめで浅いことが多い。saucer は、コーヒーや紅茶

のカップの「受け皿」である。さらに、英語の **dish** は、**do the dishes** の場合のように、皿や食器の総称として使われる。

#### 10.5 ことばと思考

言語が文化を映しているとすれば、言語を用いて行っている思考に、言語の特質が影響するだろうか。もし影響するのであれば、どのようなところにその影響が見られるだろうか。

#### 10.6 ことばの伝え方

かつての日本の農耕生活では、同じ集落に住み、互いをよく知っている人々がいつも一緒に作業をしていた。このような共同体の文化では、共通している経験や同じように持っている情報の割合が大きいため、ことばで明示的に言い表す度合いが小さい伝え方が用いられる。

現代の日本でも、都市化が進み、様々な外国語や異なる文化圏の人々に接することがあるにも拘らず、多くの人が、場面や状況に頼る言葉遣いをしているのではないだろうか。例えば、日本語母語話者と英語母語話者が同じ状況を見ても伝え方が異なる。日本人とアメリカ人とが同じ店を出た時の外の状況を見て述べたものである。

日本人：濡れている。雨だ。

American: **The surface (of the street) is wet. It must have rained.**

日本人が、店を出た時に路面がぬれている事実と、雨が降ったのがその原因にちがいないという判断を、この場面の状況に頼って、最小限のことばで伝えているのである。他方、アメリカ人の場合、第1番目の文で、何が濡れているのかの主語は省略しない。第2番目の文で、天候などのことを示す **it** が省略されないのはもちろんであるが、雨が降ったという判断に確信があることが、**must have rained** により明示されている。この様な対比から、日本人は、ことばとして明示的に言い表す度合いが小さく、場面に頼る度合いが大きい伝え方を用いる場合が多い。一方、アメリカ人は、ことばで明示的に言い表す度合いが大きく、場面に頼る度合いが小さい伝え方を用いる傾向がある。エドワード・ホール (Edward Hall) は、日本の様な文化を「高コンテクスト (high context) 文化」、アメリカの様な文化を「低コンテクスト (low context) 文化」と呼んだ。

### 10.7 サピア・ウォーフの仮説

言語が思考に影響するという主旨の仮説として、「サピア・ウォーフの仮説 (the Sapir-Whorf hypothesis)」がよく知られている。「それぞれの個別言語の意味構造が、その言語を話す人の認識の仕方や概念形成の方法、さらに思考様式を決定する。」この主旨に沿えば、異なる言語の話者は、現実の捉え方が異なり、概念の形成の仕方でも異なり、結果として、思考様式も異なることになる。しかし、言語が思考様式に「規定する」「決定する」というような強い解釈ではなく、「影響する」という弱い解釈である。

### 10.8 色彩語と言語決定論

ニューギニアのダニ語 (Dani) は、「白」に相当する語と「黒」に相当する語の2つの色名しかないと報告されている。「言語決定論」に従うのであれば、ダニ語の話し手の色彩認識は、「白」と「黒」も2つしかできないはずである。

ブレント・バーリンとポール・ケイの色彩語の研究によれば、人間が使う「基本的色彩語」の序列が決まっているという。色名が2つなら、「白」と「黒」であり、3つなら、「白」と「黒」に「赤」が、4つなら「白」「黒」「赤」に、「緑」か「黄」のいずれかが、5つなら、「緑」と「黄」の両方が、それぞれ加わる。6つなら、「白」「黒」「赤」に「緑」「黄」に、「青」が、7つなら、さらに「茶」が付け加わる。8つなら、「白」「黒」「赤」「緑」「黄」「青」「茶」に、「紫」「桃」「橙」「灰」のうちのどれかが加わる。

ダニ語の場合、「黒」に当たる語は暗色系、寒色系の色彩、「白」に当たる語は明色系、暖色系の色彩をカバーしているという。こうしたことが事実であるとする、ダニ語に「黒」と「白」に当たる2語しかないとしても、黒と白しか認識できないわけではなく、様々な色彩を認識し、それらの色彩を黒と白の2語で表現しているのに過ぎないということになる。つまり、文化によって色彩の識別能力に差があるわけではなく、単に、様々な色彩のいくつかの色彩語彙で表すかが異なるだけである。したがって、それぞれの言語における色名の現れ方が、認識や思考を決定しているとは言えないことになる。

### 10.9 思考の言語

言語心理学者のステューヴン・ピンカー (Steven Pinker) は、思考の言語は要素的概念か

ら構成され、人が思考する際には要素的概念を組み合わせていると言う。このことを示すために、「XがYに対して何かをする」という意味の英語の代表的な動詞を取り上げて、それらに含まれる要素的概念を以下のようにまとめている。

動詞の種類	含まれる要素的概念
hit	動き, 接触
cut	動き, 接触, 結果
break	結果
touch	接触

上の表に示されている要素的概念は、話し手が伝達の状況に応じて使うべき動詞を決定する。例えば、**He broke the bicycle.** (彼は自転車を壊した) が、ハンマーなどで壊すのではなく、体重の重さで壊してしまったという場合にも成り立つのは、**break** という動詞に含まれる要素的概念は「(壊れたという) 結果」のみであり、ハンマーなどによる「動き」の要素的概念は含まれないからである。

このように、言語は、語彙や伝え方において、話し手の文化や生活環境に影響され、日本語話者も英語話者も、それぞれの言語を「話すための思考」を余儀なくされ、その限りにおいて、言語が思考に影響すると言える。また、言語が、一般的な要素的概念の組み合わせによる思考に基づいているとすれば、言語は、認識や思考に影響されると言える。

#### 【参考文献】

- 池上嘉彦 (1981). 『「する」と「なる」の言語学：言語と文化のタイポロジーへの試論』、大修館書店。
- 小島義郎 (1988). 『日本語の意味 英語の意味』、南雲堂。
- ピンカー、スティーヴン (幾島幸子・桜内篤子訳) (2009). 『思考する言語』、NHK ブックス。
- Berlin, Brent and Paul Kay *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution* (California: University of California Press, 1969).

## 第11章 社会言語学

### 11.1 はじめに

本章では、社会と言語との関係における社会言語学において、特に階級による英語の違いを述べる。日本語は私たち日本人が共有する1つの言語である。しかし、実際に使われている日本語は単一ではない。地方によって異なる方言が話されているし、階級・年齢・性別によっても使われる日本語には差異がある。また、一個人が使う日本語も、改まった時とくつろいだ時とでは語彙や言い方に違いが出る。このように言語は、同一の言語であっても、使う人や使われる場面によって多様に変化する。英語についても、世界のどの言語についても同じことが言える。

### 11.2 社会階級とは

社会階級とは、社会の中にあるいくつかのグループの上下関係による序列である。しかし、社会階級による層形成は、どこでもあるわけではない。社会階級を決定する社会的な差異の中には、年齢、性、人種、宗教、経済などがある。

例えば、インドでは「カースト制度」という形で社会階級を構成している。「カースト」というのは、安定した集団の中で、バラモン、クシャトリア、ヴェイシヤ、シュードラといった互いにはっきりとした異なる名で呼ばれ、厳然と切り離された集団である。それぞれの集団の構成員は世襲的に定まっており、一つのカーストから他のカーストへ移る可能性は極めて低いのである。

### 11.3 英語圏における社会階級

英語圏における社会階級では、上記のインドのカースト制度とは違い、社会的な状況ははるかに流動的である。社会的に流動性があるとは、社会階級をその社会の構成員が上から下に、下から上にと動くということである。また、社会階級と言っても、はっきりと限定された、あるいはカースト制度の場合のようにそれぞれの階級に特有の名前をつけられた実在物ではなく、単に似たような社会的・経済的特徴を持った人たちの集合体である。

#### 11.4 社会階級的方言

社会階級は、言語において極めて反映されるのである。それを、社会階級的方言と呼ぶ。社会階級的方言は、社会階級の違いによって、固有な特徴をもつ言語のことである。

例えば、英語の母語使用者には、次のようなことばを話す人がいる。これらを聞いた母語使用者ならば、話者がどの階級に属するか、ただちに判別をすることができるのである。つまり、母語使用者がAとBが次のように話すのを聞いたら、Bの方がAよりも社会的身分が高いと考えるだろうし、またその判断はほとんど確実に正しい。(P. トラッドギル, 29)

話し手 A  
I done it yesterday.  
He ain't got it.  
It was her what said it.

話し手 B  
I did it yesterday.  
He hasn't got it.  
It was she that said it.

上の例で、2人のことば遣いに、母語使用者は、まず文法的な差異に気づく。AのI doneはI didであり、ain'tはhasn'tにしなければ文法的に誤りである。これらの違いは、また、実際の会話では、音声的な違いを伴うのが普通である。このように、同じ社会でも、その属する集団が違えば、その人の使う言語も異なるのである。これが社会階級的方言である。母語使用者は、この人が使用する言語によって、社会的にどの階層に属する人がすぐに分かるのである。

#### 11.5 社会階級的方言の発達

社会階級的方言の発達について、社会的な障壁と社会的な距離から述べることができる。

言語が、その社会の中に拡がっていく際に、地理的な要素が障壁となって、地理的方言をつくるように、社会階級・年齢・性・人種・宗教・経済などが障壁となって、社会階級的方言もつくるのである。つまり、社会階級・年齢・性・人種・宗教・経済などといった社会的な距離が、地理的な距離と同じ働きをすることもある。しかも、特に社会階級においては、社会的に最も高い階級で起こった言語変化が、次第に下の階級に拡まって、一番下の階級にまで達するのには、たとえ

到達するにしても最後になるのである。

## 11.6 標準的英語

標準的英語とは、学校や出版物で使われたり、あるいは英語を母語としない人たちに教えられたりする英語の訛りの一種である。また、それは、教育を受けた人々によって話され、ニュースの放送などに使われるものである。

標準的言語と標準的でない言語との違いは、あらたまった堅い言い方 (formal) と、くだけた口語体 (colloquial) との違い、あるいは「悪い言い方」というような考えとは、原則的に無関係である。標準的英語の中にも、あらたまった言い方と同時に、口語的な言い方もあり、標準的な英語の話し手といえども口汚くののしることもある。もし、誰かが卑俗な表現や口語的な言いまわしをすれば、それは、その人が標準的な英語を話していないことを示すものだと考える人が多いのである。

しかし、英語の歴史において、標準的英語というのは、ロンドンやその周辺で使われていたいろいろな方言から発達したものであり、宮廷や大学の学者や作家や、後にはパブリック・スクールによって、何世紀もかかって次第にこれらの方言が修正されて形成されたのである。18世紀になると、首都ロンドンの上流階級の人たちが使う英語は、他の階級の人たちの英語とは、発音・語彙・表現・文法において、著しく違うものになった。やがて、標準的英語は、階級を向上させる目的で、英語を上手に話したり書いたりしたいと願う人たちの手本と見なされるようになったのである。印刷技術と本の出版が社会に普及するようになると、標準的英語は、広く使われるようになり、多くの変化を受けながら、社会において経済的に裕福で教養のある階級の人たちによって認められた英語なのである。

標準的英語の中には、いくつかの地方差があり、これらの違いは人の注意を引きやすい。スコットランドの標準的英語は、英国の標準的英語とは同じではないし、lift と elevator のようにアメリカの標準的英語とも違っているのである。また、例えば、分詞および動名詞の使用において、イギリスでは “I have got.” と言い、アメリカでは “I have gotten.” という。またイギリスでは “It needs washing.” と言い、スコットランドでは “It needs washed.” と言う。また、もっと狭い地域に見られる変異もいくつかある。例えば、英国の中北部地方の一部では、北部の訛



りと南部の訛りが対立して、北部では“You need your hair cutting.”と言い、南部では“You need your hair cut.”というように準動詞の使用において差がある。

### 11.7 社会階級の方言の調査

1966年にアメリカの言語学者ウィリアム・ラボフ(William Labov)は、ニューヨーク市のことばの大規模な調査の結果を公表した。彼は、340人のインフォーマント(言語資料提供者)に対し、録音器を使った面接を行った。従来の調査方法は、友人を通じたり、個人的な接触によってインフォーマントを選んだりする方法だったが、この際には、科学的に立案された任意抽出法によってインフォーマントを選んだ。こうすることによって、たとえすべての人に面接するのは無理だとしても、すべての人が等しく面接に選ばれる機会があるということになる。

この任意抽出法という社会学的な方法を、言語学に適用することによって、ラボフは自分のインフォーマントがニューヨークのことば(あるいは少なくとも彼の調査した特定の地域であるイーストサイド南部のことば)を代表するものであると主張した。つまり、これらのインフォーマントは見本なのだから、その資料に基づいた言語の記述も、この地域で話されている英語のすべての訛りを正確に記述したものと言えるわけである。

#### (1) 『ニューヨーク市における英語の社会階層』におけるニューヨーク市における母音の後の /r/ と社会階級との関係

ラボフは、ニューヨーク市において母音の後の /r/ が使われる比率を社会階級およびスタイルによって調査した。その結果、フォーマルなスタイルになればなるほど、権威ある形すなわち、母音の後の /r/ が多く使われ、下の階級のフォーマルなスタイルは、上の階級のカジュアルなスタイルに近づくことがわかったのである。

#### (2) 米国デトロイトと英国ノリッジにおける黒人話者の三人称単数現在形 -s の比率

ラボフは、米国デトロイトと英国ノリッジでも言語と社会階級の関係を検査した。両国のインフォーマントは、ノリッジとデトロイトの黒人の話し手である。標準的な英語では、動詞の三人称単数現在形は正書法で -s と書かれる接辞を持っており、I know, we know, they know に対して she knows のように、この -s が

他の人称形と区別する働きをしている。ところが、デトロイトとノリッジでは、少なくともある人たちのことばでは“*She like him very much.*”“*He don't know a lot, do he?*”“*It go ever so fast.*”のように、-s は現れないことが多いといわれていた。これまでみてきたように、言語は社会階級と密接に結びついているのだから、社会階級の差とこの -s の使い方との間には相関関係があるのではないかと考えられた。

そこで、ラボフは、調査の時の録音を聞いて、話し手がこの -s を何回使い、あるいは何回使わなかったかを実際に数えた。その結果として、「動詞に -s のつかない場合の比率」として、デトロイトでは、中流中産階級 0%、下流中産階級 2%、上流労働者階級 70%、中流労働者階級 87%、下流労働者階級 97%であり、ノリッジでは、上流中産階級 1%、下流中産階級 10%、上流労働者階級 57%、下流労働者階級 71%であった。ちなみに、ノリッジのインフォーマントは、社会階級を示す指標に基づいて、中流中産階級 (*middle middle class*)、下流中産階級 (*lower middle class*)、上流労働者階級 (*upper working class*)、中流労働者階級 (*middle working class*)、下流労働者階級 (*lower working class*) の 5 つに分類された。一方、デトロイトのインフォーマントは 4 つの階級グループに分類されている。この調査から、社会階級と -s の使い方には明瞭に相関関係があることがわかる。

さらに、ラボフはこの調査から、以下のように分析し、報告している。

① 我々がどのような情報に基づいて、話し手がどのような社会的地位にある人なのかを判断しているのかを示している。我々は、長年の経験によって、社会階級と標準的あるいは地方的言語形式との間に相関関係があることを、普通は無意識のうちに、よく心得ている。

② 上の 2 つの共同体の社会構造が多少とも分かる。どちらの場合も、下流中産階級と上流労働者階級との間に最も大きい比率の開きが現れている。「中産階級」と「労働者階級」という区分は、主として、肉体労働に従事しているか否かの違いによっている。しかし、社会的な障壁が言語にはっきり反映しているのを見ると、社会をこの大きな 2 つの階級グループに分けるのは、かなり有効であり、重要であることを示している。

③ 個人語について上に述べた点をよく示している。動詞形一つを取ってみても、一人ひとりの個人についてみれば、ある時にはこの形を、他の時には

別の形を使うというように差があるかもしれない。しかし、それぞれのグループ平均をとってみると、かなり予想可能なパターンに落ち着いてしまうのである。(トラッドギル, 42 - 43)

さらに、ラボフは、社会階級的方言というものについて、上の調査から、一つの言語の訛り全体を扱ったのではなく、ただ一つの特徴を取り上げたものにすぎないが、それでもなお、社会階級的方言が、地域方言と同様、決して互いにはつきり区別された実在物ではないということを指摘している。つまり、いくつかの社会階級的方言は、互いに重なり合いながら一つの連続体をなしているのである。そこで、ラボフは「中流労働者階級ノリッジ方言」という名称を使用しているが、その際には、次の点を明確にさせている。

- (a) 社会階級を五つに区分したのは根拠がないかもしれない。
- (b) そこに見られる言語的な違いは単に相対的なものであり、ある特定の特徴がどのような頻度で現れるかを示すものでしかない。
- (c) もし別の特徴を使えば、違う結果になるかもしれない。(トラッドギル, 43)

デトロイトの調査でラボフは「デトロイトの黒人方言では、動詞の現在形に三人称を示す標識がない」などと言うのは正しくないと指摘している。つまり、デトロイトの黒人たちは、どの社会階級に属する人でも、*it go* と *it goes* という両方の言い方をするのであって、違うのはどちらの方をより多く使うかという比率だけであることを理由にあげている。言語と社会階級の調査をしたラボフは、また、ある社会階級がその固有の方言を必ず使用するというステレオタイプも諷めている。

## 11.8 英語における社会階級的方言の特徴

英語においては、方言や訛りが社会階級という背景の違いに関係しているという。保守的な、特に農村の諸方言（社会階層の最下位の集団と結びついた古風な訛り）は、地方へと進むに従って、ある地点から他の地点へと次第に変化して行く。その間には一連のさまざまな方言があつて、それらが互いに重なり合いながら次第に変化している。このような方言の連なりは、「方言連続体 (dialect continuum)」と呼ばれる。この方言連続体とは、非常に多くの、互いに異なっ

はいるが、普段は、はっきりと互いに区別できない非標準的な諸方言が、類似性によって結ばれたものと言える。しかし、その連鎖の両端の方言をとってみれば、非常に異なっている。

ところが、社会組織という点から見ると、その事情は変わってくる。一番上の社会階級の話し手たちは標準的な英語と呼ばれる方言を使っている。

まず、語彙を例にあげると、普通、鳥を追い払うために畑に立てる人に似た物体を意味する単語（かかし）に対しては、*scarecrow* という単語一つしかない。ところが、最も地域差の激しい英語方言の部分では、*bogle*, *flay-crow*, *mawpin*, *mawkin*, *bird-scare*, *moggy*, *shay*, *guy*, *bogeyman*, *shuft*, *rook*, *scarer*, など「かかし」を呼んでいる。

次に、文法を例にあげても同じで、英語では、例えば、*He's a man who likes his beer.* や *He's a man that likes his beer.* が文法として容認される。ところが、地域的な変異はもっと激しく、上記以外に、次のような言い方がすべて可能であるという。

*He's a man at likes his beer.*

*He's a man as likes his beer.*

*He's a man what likes his beer.*

*He's a man he likes his beer.*

*He's a man likes his beer.* (トラッドギル, 38)

さらに、発音上の違いについても同じで、英語では、*British English* の発音、より正確には *English English* の発音であって、「容認発音」(*received pronunciation*, RP と略す)と呼んでいる。RP とは、元来、英国のパブリック・スクールで発達した訛りであり、かつての BBC 放送のアナウンサーはすべてこの訛りで発音することが要求されていたものである。これは通俗的には、例えば、「オックスフォード英語」とか「BBC 英語」とか、いろいろな名前で知られており、英語が母語でない人が英国の発音を学ぶ際には、今日でもなお教えられている訛りである。

また、RP は、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、カナダの一部と同様に、イギリス諸島の他の地域でも権威も持っている。しかし、しいてどの

地方に特有な発音かと言えば、それはイングランド地方に限られていると言われる。ところが、英国全体をとってみれば、RP というのは、どの地方に固有の発音とは言えず、標準的な英語を話すためには RP を発音しなければならないというわけでは決していないのである。標準的な英語でも、地方的な訛りをつけて話すことがあり得るし、また事実多くの場合には通常そうなっているのである。

### 11.9 権威ある標準的な英語

言語は一つの社会現象であるから、社会構造やその社会の価値体型と密接に結びついているので、いろいろな訛りも、その評価のされ方はさまざまになる。

例えば、標準的な英語は、他のどの英語の訛りよりも高い信望と権威を持っている。それは多くの人々によって高く評価され、経済的、社会的、政治的な利益なども、標準的な英語を話したり書いたりする人たちに自然と有利になる傾向がある。

11. 8 でも述べた RP もまた非常に高い権威を持っており、事実、英語を話すほとんどの社会で、人々はその甚だしさを実感している。つまり、標準的な英語とそれに伴う発音があまりにも権威も持ちすぎようになった結果、それらはすべて「正しい」、「美しい」などと広く認められるようになってしまったのである。その他の標準的な英語でない訛りは「間違っている」、「きたない」、「訛っている」などと考えられ、英語と言え、すなわち標準的な英語のことだとさえ考えられるのである。そうすると、英語の他の訛りはすべて正常なものからはずれたもの、それもだらしなさ、無知、知性の欠如に由来する逸脱したものであるとすら考えられるようになったのである。

### 11.10 U and Non-U

言語の階級差は、U and Non-U として知られている。U とは upper class (上流階級) を示し、Non-U とは working class (労働者階級) を示している。それは、「発音」だけでなく、「語句の選択」も含まれている。以下の表は、U and Non-U の用例である。以下は、語の選択の例である。

	U-words	Non-U-words
家	house	home
裕福	rich	wealthy
ラジオ	wireless	radio
鏡	looking glass	mirror
用紙	writing-paper	note-paper
ジャム	jam	preserve
乗馬	riding	horse-riding
トイレット・ペーパー	lavatory-paper	toilet-paper

発音においては、以下のような違いがある。

	標準的英語話者の発音	上流階級話者の発音
fire	ファイヤー	ファー
There is	ゼヤーイズ	ザリーズ
so	ソー	サウー
aware	アウェア	アワー
years	イヤーズ	ヤアーズ
hair	ヘヤー	ハー

#### 11.11 上流階級の言語

英国の上流階級の人々には、発音や語彙の選択以外にも、自身を権威づけるために、コミュニケーションにおいて、従来より以下のような表現がある。

① We must keep in touch! Please come and have tea with us one day.

パーティーで知り合い、別れ際によく出る挨拶だが、「では、さようなら」に色をつけているだけで、その内容はまったくくない。

② Well, yes.

肯定的な応答ではあるが、実際の応答は、拒否しているのである。

③ I see your point.

こちらが意見を述べたり、要求したりすると、受身になった英国人はたいていこの“I see your point.”をもっともらしい顔をしながらよく述べる。相手はこちらに同意しているように聞こえるが、実際には“Go on”「それから……」を意味し、話し手の立場に同意するかしないとは全く無関係である。また、逆に“I never quite see the point of …”という表現があるが、これは“I don't like it.”を意味しているのである。

④ As you know ...

直訳すると「ご承知のとおり」という意味だが、実際は「あなたはご存じないでしょうけど」という意味している。

⑤ rather

会話においてメッセージをほとんどもたない表現である。スノップ（物欲や名誉欲を追求することだけでいっばいの・下品なやな奴）になればなるほど「ラーザァ」といった具合に ra・ を長く発音しがちである。

## 11.12 Swearing

社会階級的方言の中で、とくに品の悪いことばとしてあげられるものが **swearing** である。

**swearing** は「(1)宣誓、誓言、(2)ののしり、悪たれ口」とあり、**swearwords** (**S-words**)は、「不敬な言葉、罰当たりの(卑猥な)言葉、悪口、ののしり」、「強意のためだけで、ほとんど無意味に添えられるもの」と定義されている。(研究社『新英和大辞典』第7版)

しかも、実際には **swearwords** は人前、特に女性の前では平気で使えないのである。イギリス人は、会話の端々によく **bloody** ということばを挟むといわれる。この **bloody** は、元来「血まみれ」といった意味だが、**swearing** の場合は、強意のためだけで、ほとんど意味がない。例えば、形容詞に限らず名詞にもほとんど無差別に使われ、**bloody pub, bloody beer, bloody tea, bloody home, bloody book, bloody cinema, bloody underground, bloody sun, bloody rain** といった例がある。

労働者階級の人々が、頻繁に **bloody** を言葉に挟むという。というのは、潤滑油のようなもので、名詞や形容詞に **bloody** がついていないと分かりにくいようであ

る。

社会的に使用することが認められている S-words は、存在しているが、その使用は分別をもって使用するべきことであることは当然である。現在のところ、“F-words” (F...k, F...king) は、英国でも日常生活では、使用されないが、bloody の使用が社会で認知されたように、将来においては、分別ある使用という条件さえあれば、日常生活でも使用されるかもしれない。

### 11.13 コックニー

Cockney とは、ロンドン（地域）で用いられている方言のことで、コックニー英語 (Cockney English), ロンドン訛り (London dialect) などともいう。また、これは、俗語 (slang) 的要素を含んでいるために、従来は訛りとしてよりも、俗語的英語として扱われてきた言語である。Cockney の語源は、中期英語 coken-ey (= cock's egg 無精卵) に由来するとも、中期フランス語方言 acoquine (= pampered) に由来するともいわれ、チャーサーの『カンタベリー物語』では「(都会育ちの) もやしっ子」のことを示していたが、やがてロンドン子や、彼らの話す特有のことばの異名となったようである。生粋のロンドン子というのは、伝統的にはロンドン旧市部にある Cheapside の St.Mary-le-Bow, 一般には Bow Church と呼ばれている教会の鐘の音の聞こえる範囲内に生まれ、そこに一生住んでいる人を指した。

現在では、Cockney は、一般にロンドン東部に住む教養のない人々のことばに限定されがちであるが、実際はもっと広範囲に用いられているもので、テムズ川の南部で話される Camberwell Cockney, Lambeth Cockney も含め、さらに大ロンドン (Greater London) に存在するあらゆる職業人に用いられているロンドン訛りを総称しているのである。

Cockney の特徴は、発音のみならず、文法と慣用法、語彙、スラング、特に、押韻スラング (Rhyming Slang) に現れている。

(発音)

#### ① 母音

(a) [ei]>[ai]: minely (mainly), pline (plain), rine (rain), sy (say).

(b) [ai]>[a:], [ɔi]: bah (by), lahf (life), tahm (time); loike (like), moi (my), oil



(11)

(c) [ə]の挿入 (schwa epenthesis): lovely[lʌvəli] (lovely), 'enery[enəri] (Henry)

② 子音

(a) [h]音の脱落 (H-Dropping)

イングランドの他の地域と同様、コックニーも語頭の[h]音が脱落することで知られている。'air (hair), 'ead (head), 'ouse (house)など。逆に、語頭の母音の前に[h]が現れる。hair (air), heggs (eggs) Sivertsen はこのような現象は強勢を伴う音節の初めに出る、としている。

(b) [f]と[v] (TH-Fronting)

コックニーの特徴は[e]の代わりに[f], 語中で[ð]の代わりに[v]になることである。

firty fahsn (thirty thousand), evryfink (everything), nuffink (nothing), somefing (something); bovver (bother), fawver (father), 'ivaht (without), muvver (mother)

(c) Linking R: つなぎの r. コックニーは、一般米語 (General American)

のように、母音の後に r を響かせないが、'draw/r/in' room (drawing room), 'Shah/r/ of Persia (Shah of Persia)'のようにつなぎの r を入れる。

(文法および語法)

(a) 冠詞

母音の前でも a を用いる。a egg, a hour がある。

(b) 多重否定

There ain't nuffink like it. (There is nothing like it.)

ここで、ain't は am not, are not, is not の縮約形や have not, has not の縮約形を表す。

(c) 動詞

① すべての主語に-sをつける。主に過去回想文に用いる。

And then I *gets* a message from her this morning.

② did, saw など過去形の代わりに done, seen を用いる。

I *done* it yesterday. I just *seen* er.

(語句)

Garn! (Go on), bloomin' (bloody ひどい, すごい), Blimey (<God blind me! しまった, 畜生), governor 「だんな」, done (did), in (killed バラした)などがある。

Cockney のもっとも有名な用法として押韻スラング (Rhyming Slang) がある。

Would you Adam and Eve it? = Would you believe it? や They had a bit of a bull and a cow. = They had a row. 標準的英語の同義語と韻を踏む独特のスラングであり, 身近な日常語に多い。

以上のように, 本章では社会階級と言語について述べてきた。社会階級と言語は密接に関係があり, 社会階級が言語にあるいは言語が社会階級にどのような影響をおよぼすか例をあげながらみてきた。言語というものは, そもそも社会的な現象の一つであり, 社会という場面をとらえながら, 言語を研究することにより, 言語のより複雑なしかも興味ある面を発見することにつながるのである。

#### 【参考文献】

東照二 (1997). 『社会言語学入門 : 生きた言葉のおもしろさに迫る』, 研究社出版。

倉田保雄 (1994). 『女王陛下の英語—エレガンスとユーモア』, 講談社。

コーツ, ジェニファー (吉田正治訳) (1990). 『女と男とことば : 女性語の社会言語学的研究法』, 研究社出版。

トラッドギル, P. (土田滋訳) (1975). 『言語と社会』, 岩波書店。

ロメイン, スザーン (土田滋・高橋留美子訳) (1997). 『社会のなかの言語—現代社会言語学入門—』, 三省堂。

## 第12章 認知言語学

### 12.1 はじめに

冷蔵庫のドアが開いているのを見て, 「冷蔵庫閉めて!」と言ったり, 「時間」について「お金」であるかのように「無駄にするな」と言ったりするのは, なぜか。これらはどれ

も、ことばが物事の捉え方や認識の仕方と深く官営していることによるのである。

## 12.2 意識と認知

この絵の黒い部分と白い部分で構成される右の絵 (Edgar Rubin, 201) は、どのように見えるだろうか。白の部分の方に意識を向けるならば、物を載せる台のように見え、黒の部分に注目すると、向かい合っている2人の横顔のように見えるはずである。これは、絵でも、どこに意識を向けるかによって絵の見え方が異なってくることを示している。意識が向けられた部分は「図 (figure)」、向けられなかった部分は「地 (ground)」とそれぞれ呼ばれる。このような意識の向け方のことを「図地分化 (figure-ground segregation)」と言い、この視覚のプロセスは、言語においては以下のような言語表現の違いに見られるのである。



- a. 家のそばに自転車がある。
- b. The statue stands in front of the station.

一般的に、2つの物が見えるとき、大きい物よりも小さい物に意識が向きやすいため、a.では「自転車」が、b.では the statue がそれぞれ「図」となる。

## 12.3 視点の移動と認知

例えば、友人からおいしいお寿司の店を知らないかと尋ねられ、それなら行きつけの店があると言って、次のように店への行き方を教えるとする。「駅前通りを真っ直ぐに進んで、1つ目の信号を左に曲がって、カラオケボックスを右手に見ながら進み、コンビニを過ぎてから10メートルくらい行った左側にあるよ。」道を教える側も教えてもらう側も、上の文から頭の中に店への道筋がイメージされるだろう。

このように私たちは、実際に道路を歩かなくても歩いて進んでいるかのように頭の中で視線を移動させ目的地に到達することができる。このような想像上の視線の移動は「心的スキニング (mental scanning)」と呼ばれる。このような例は、視覚に関わる認知のプロセスが、言語においても同様に見られることを示している。

## 12.4 想像による認知とことば

私たち、架空の動きをイメージしたり、架空の動きの結果としての状態をイメージした

りできる。このような認知能力は、言語とどの様に関係しているのだろうか。実際には、想像による認知のプロセスは、言語においても同様に見られるのである。

現実には起こりえない「想像上の動き (fictive motion)」は、心的スキヤニングだけではない。This road is winding through the mountains. この文には、wind (曲がりくねって進む) という動詞が含まれているが、この動詞は、A snake was winding through the grass. のように、本来は実際の動きを表わす。したがって、上の例では、road 自身が実際に動くわけではないので、蛇が進むような想像上の動きがイメージされていることになる。

これと同じような認知のプロセスが、次のように言語表現に見られる。a broken line (折れ線) と a broken leg (折れた脚)、scattered villages (散在する村々) と scattered marbles (散らばったおはじき)。これらの a broken leg と scattered marbles は、それぞれ「折る」「散らばる」という実際の動作や移動の結果として、脚が折られたり、おはじきが散らばった状態にあることを示している。では、a broken line や scattered villages の場合はどうか。これらの例は、実際に line が折れたり、一カ所にまとまっていた villages が散らばったりしているわけではなく、想像上の動きの結果としての変化を表わしていると言える。

## 12.5 カテゴリー化と言語形式

私たちは、日常生活の中で、物をグループに分けて認識し、必要に応じて記憶する。物をグループに分けるこのような認知能力は、「カテゴリー化 (categorization)」と言われる。物をカテゴリーに分ける場合は階層構造となる。「物 (thing) > 生き物 (creature) > 動物 (animal) > 犬 (dog) > 柴犬」このように、最も小さな (詳しい) 「柴犬」というカテゴリーから最も大きな (大まかな) 「物 (thing)」というカテゴリーまで、階層的となっている。

ところで、認知という点では、脳に最も負担のかからないカテゴリーは「犬」だと言われている。実際に、「物」「生き物」「動物」は、いずれもある個別の対象を認識するにはカテゴリーの範囲が広すぎる。一方、「柴犬」では、カテゴリーの範囲が狭すぎて、イヌの種類の数だけカテゴリーが必要となる。カテゴリーの数が多くなるということは、それだけ認知において複雑さが増し、脳にかかる負担も増えると考えられる。

人とのコミュニケーションにおいては、語の指すもの、つまり指示対象をはっきりさせる必要がある。そのため、指示対象の範囲が広すぎる語は効率が悪い。かといって、詳しい知識を必要とする語は、理解するのに困難となることがある。コミュニケーションにお

いて、最も効率の良い語は「基礎レベル語 (basic-level term)」と呼ばれ、上の例での「犬」がそれにあたる。

## 12.6 全体的・局所的な見方と言語形式

私たちは、ある物を全体として認識する場合もあれば、その一部しか認知しない場合もある。

- a. This road is winding through the mountains.
- b. This road winds through the mountains.

a.は、話者が実際に山道を歩いている状況で用いられる文で、**this road** が表わすのは、話者がある時点で実際に目の前に見ている山道の一部分である。一方、b.は、山の地図を見ている状況で用いられる文で、山地と山道が全体として一つのものとして認識されている。別の言い方をすれば、a.は、時間と共に変化する「局所的な見方 (local perspective)」をしている場合であり、b.は時間的に左右されない不変の「全体的な見方 (global perspective)」をしている場合であるといえる。

## 12.7 概略的把握と言語形式

ここでは、概略的把握、つまり事態を概略化して捉えるという認識の仕方が、ことばに反映されることを見る。

- a. はやく冷蔵庫を閉めて。
- b. 収穫の準備に手が足りない。
- c. トランペットが聞こえた。

a.では、閉めるのは「冷蔵庫のドア」であって、「冷蔵庫」全体ではない。b.では、足りないのは、「(準備する)人」であって、「手」ではない。c.も、聞こえたのは「トランペットの音」であって、「トランペット」本体ではない。この様な現象は、日本語だけでなく以下のように英語にも見られる。

- a. Close the fridge, please.
- b. We need three extra hands for the harvest.

### c. I heard the trumpet.

日本語の例も英語の例も、あるものとそれと密接に関係する物で表す表現であることが分かる。冷蔵庫の例は、「(冷蔵庫の) ドア」を、それを含む「冷蔵庫 (全体)」で表している。つまり、「全体」でその「一部」を表わす例である。一方、手の例は、「一部」でそれを含む「全体」を表わす例である。身体の「一部」(手)で身体の「全体」(準備する/働く)他人」を表わしている。さらに、トランペットの例は、部分と全体の関係というよりも、「トランペット」とそれと密接に結びついた「(トランペットから出る) 音」の関係である。これらに共通しているのは、2つの物が互いに何らかの密接な関係にあり、これらの関係を「隣接性」と呼ぶ。

### 12.8 メトニミー (metonymy)・シネクドキー (synecdoche)

最近の考え方は、隣接性に基づいて一方の物で他方の物を表わす比喩は「メトニミー (換喩)」と呼ばれる。しかし、従来のメトニミーは、American presidency (アメリカ大統領の職) を the White House (アメリカ大統領官邸) で表したり、「ハワイ」を「常夏の島」で表したりするように、ある物をその属性・特性で表す比喩と考えられてきた。また、メトニミーの中でも、冷蔵庫の例で見たような「全体」で「部分」に関する比喩は、特に「シネクドキー (提喩)」と呼ばれることがある。

メトニミーは、意味という観点から見れば、意味の拡張として捉えることができる。では、認知という観点から見れば、どうか。もし「車にガソリンを入れる」と言うかわりに「車のガソリンタンクにガソリンを入れる」と言わなければならないとすると、複雑さが増すのは確かである。このように事態を概略的に把握するという認識の仕方が、メトニミーは、という言語形式に反映されていると言える。

### 12.9 類似性に基づく認識と言語形式

人には、高さや大きさなどを比べて、同じか異なっているかを認識する能力がある。このような認知能力は、ことばに反映される。

- a. 月見うどん、目玉焼き、メロンパン、割れ目
- b. 釘の頭、鼻の頭、船首、機首、船尾

a.の例の「月見うどん」は、うどんの上ののった卵の黄身が「満月」に似ているのでそう呼ばれる。「目玉焼き」も、卵の白身と黄身からなる全体的な形が「目(玉)」に似ていることによる。「メロンパン」は「メロン」に形が似ていることに起因する。

b.の例では、「釘の頭」は釘の最上部と人の身体の上部の頭の位置が類似していることによる。「船首」の「首」も、頭を指すので、人の頭との位置の類似性が見られる。このように類似性に基づく比喩は、「メタファー (metaphor) 隠喩」と呼ばれる。メタファーの基盤となる最も基本的な認知能力は、2つの物を比べて、一方で推論したことを他方へ転用する能力である。

## 12.10 言語形式と認識

言語形式が認識の仕方に影響を及ぼすにおいて、レイコフとジョンソンは以下の例を紹介している。

- a. He's in love. (彼は恋愛中です)
- b. We're out of trouble. (もめごとが無くなった)
- c. You're wasting my time. (君は僕の時間を浪費している)
- d. This gadget will save your hours. (この機械装置を使えば何時間も節約できる)

a.とb.では、「恋愛」や「もめごと」という輪郭のはっきりしないものが、in やout ofの言語形式を用いることによって、仕切られた空間としての「容器」という輪郭のはっきりとしたものとして認識されている例で、「容器のメタファー (container metaphor)」と呼ばれる。c.とd.では、waste (浪費する) やsave (節約する) という語が用いられていることから、「時間」という抽象的な概念を「お金」という具体的な概念を用いて表している。TIME IS MONEY (時は金なり) というメタファーも同様である。このように言語形式によって認識の仕方が左右されている。

### 【参考文献】

- 河上誓作編 (1996). 『認知言語学の基礎』, 研究社出版.
- 瀬戸賢一 (1995). 『メタファー思考—意味と認識のしくみ』, 講談社現代新書 1274, 講談社.
- 瀬戸賢一 (2005). 『よくわかる比喩—ことばの根っこをもっと知ろう』, 研究社出版.
- 辻幸夫編 (2003). 『認知言語学への招待』, 大修館書店.

辻幸夫編 (2002). 『認知言語学キーワード辞典』, 研究社出版.

松本曜編 (2003). 『認知意味論』, 大修館書店.

榎山洋介 (2010). 『認知言語学入門』, 研究社出版.

吉村公宏 (2004). 『初めての認知言語学』, 研究社出版.

Lakoff, George and Mark Johnson *Metaphors We Live By*. (Chicago and London: University of Chicago Press, 1980)

Edgar, Rubin "Figure and Ground," *Readings in Perception* ed. David C. Beardslee and Michael Wertheimer, 194-203 (Princeton: D. van Nostrand, 1958)

## 第13章 文体論

### 13.1 文体論とは

文体論とは、文学作品における言語の文体を研究する分野である。では、文体とは何か。ディビッド・クリスタルとディレック・デーヴィは、*Investigating English Style* で4つの定義を掲げている。(David Crystal and Derek Davy, 9-10)

- (1) 文体は個人個人の言語習慣—例えば、シェイクスピアの文体とか、ジェームズ・ジョイスの文体を言う時のごとく—を言う。(この場合文体は個人の性格と同一視されたり、混同されたりする) 個人の言語をすべて取り上げるわけにはいかないで、普通でない言ひ方、独自の表現といった特徴的なものを言うことになる。
- (2) 文体はある時代のあるグループの言語習慣を言う。例えば、古英語の文体とか、演説の文体とか、状況に応じた言語習慣である。
- (3) 文体は表現形式の効果あるいはその評価という意味がある。すなわち明晰な文体とか、洗練された文体と言う時、価値判断が入っている。
- (4) 文体は文学の言語の質を言う。これは上記3つの定義と重複しており、評価的であり、また記述的なものとしての文体の概念を含んでいる。

クリスタルは、以上4つの文体の定義を踏まえた上で、文体論の目的を次のように規定している。

文体論の目的は考え得る限りのあらゆる機会に用いられるものとしての、英語に共通した一般的多数の言語的特徴から、ある種の社会的コンテクストに限定された諸特徴



を明らかにする目的をもって言語習慣を分析することであり、また、可能な場合には、そのような特徴が、他の方法をとらずになぜ用いられてきたかを説明することであり、また社会的コンテクストにおける機能という考えに基づいて、これらの特徴をいくつかの範疇に分類することである。(Crystal and Davy, 10)

ここまでの文体の定義と文体論の目的から、社会的文体と文学的文体に分けて考えてみる。社会的文体と言う場合は個人の文体というよりも、社会の階層、職業、グループなどに共通している言語習慣、あるいはまた社会生活の種々の状況の中で習慣的に用いられている言語事実を対象とするものであり、文学的文体は個々の詩人、小説家の文体、あるいはその流派に共通した文体をも対象とする。文学作品、特に散文作品は社会の種々の面を多かれ少なかれ描くがゆえに社会的文体との関わりがあり、文学的文体も、社会生活の言語の中に取り入れることもあり、両者の関係は相互的であると言える。

### 13.2 言語使用域

言語使用域は *Concise Oxford English Dictionary* (第5版) では「特定の状況において習慣的に用いられる(口語的、文語的などの)言語形式」と定義される。人間の社会生活の中では無限の数の状況があるが、よく観察してみると、型に分類され、そしてそれぞれの状況の型に習慣的に用いられる言葉があることに気づくだろう。例えば、朝の挨拶、別れる時の言葉、買い物する時の言い方などがある。また語のレベルでも、場面によって用いられ方が変わってくる。日常語の **kick** は **free kick** とするとフットボール用語になり、**heart** は、**bid four hearts** とするとトランプ特有の語になる。

### 13.3 ディスコース

言語使用域を考える場合に、基準となるのがディスコースである。ディスコースの分野、様式、スタイルの3つがある。分野とは、言語活動が行われる状況の型に伴うもので、主題を言う。例えば、宗教を主題としたディスコースでは、**God** や **glory** といった関連した特有の語が用いられる。様式とは、言語活動の手段・様式を言う。話しことばと書き言葉で違いがあるのはその例である。スタイルとは、言語活動に参加している人間関係から来るものを言う。親密な間柄であれば口語的な話し方になり、そうでない間柄であれば礼儀正しい話し方になる。種々の状況にはそれぞれ特有の言語習慣がある。したがって各個人もそのような言語習慣を基にして言語を使用する。

### 13.4 方言

方言は使用者によって異なる言語の種類といえる。方言には地域方言 (regional dialect) と社会方言 (social dialect) がある。前者は、登場人物たちの話す標準語及び地方の語彙、発音、慣用表現などで、これらの使用によって地域特有の雰囲気を生み出す効果がある。後者には、階級・年齢・性といった社会的背景の違う登場人物たちの話す言語の語彙、発音、慣用表現などで、これらの使用によって登場人物たちの社会的背景を反映する効果がある。これらの方言を使用することで、作品はリアリティを生むと言える。

(地域方言の例)

She was one in an 'undred, poor maid! I putts a vlower 'ere every time I passes. Pretty maid an' gude maid she was, though they would'nt burry 'er up tu th' church, nor where she wanted to be buried neither. (Galsworthy, *The Apple Tree*)  
'undred = hundred/ putts = put/ vlower = flower/ 'ere = here/ passes = pass/ an' = and/  
burry = bury/ 'er = her/ tu = at/ neither = either

(社会方言の例)

“Were you examined at an Inquest?”  
“I don't know nothink about no-where I was took by the beadle, do you mean?” says Jo.  
“Was the boy's name at the Inkwich, Jo?”  
“Yes.”  
“That's me,” says Jo.  
“Come farther up.”  
“You mean about the man?” says Jo, following. “Him as wos dead?” (Dickens, *Bleak House*)  
nothink = nothing/ took = taken/ as = who/ wos = was/ Him = He

### 13.5 コンテキスト

Enkvist はコンテキストを「文体論的に意味のある特徴の総体」と定義した。例えば、ラテン系の難解な、あるいは華麗な語を用いたり、複雑な文構造を用いたり、また “he singeth” のような古体を使用することによって荘重体が生まれる。また比較的容易な語や単純な文構造を用いることによって平易文体が生まれ、またあるいは卑俗な語を用いることによって口語的文体が生まれる。これらの文体はその状況と密接な関係があり、用途が違

う。荘重体は真面目な、重大な問題について論じ、あるいは演説する場合に用いられ、平易文体は真面目な場面で、しかも幾分リラックスした雰囲気の場合に使われる。また親しい者同士の場合には口語的文体が使用される。荘重性、平易性、口語性は、言語的特徴の種々の様相によって程度に差があるのは言うまでもない。

(荘重体の例)

London. Michaelmas Term lately over, and the Lord Chancellor sitting in Lincoln's Inn Hal. Implacable November weather. As much mud in the streets, as if the waters had but newly retired from the face of the earth, and it would not be wonderful to meet Megalosaurus, forty feet long, or so, waddling like an elephantine lizard up Holborn Hill. Smoke lowering down from chimney-pots, making a soft black drizzle, with flakes of soot in it as big as full-grown snow-flakes-gone into mourning, one might imagine, for the death of the sun. (Dickens, *Bleak House*)

従属節の中では主語＋動詞の形をなしているが、文はすべて不完全文で、定動詞が省略されている。また Chancellor, Implacable, Megalosaurus, elephantine, lizard のようなラテン系・ギリシア系の語が使われている。また as if～や like～のような直喩表現と flakes of soot ... as big as full-grown snow-flakes のような色の対立を暗示する比較表現があり、これらが関連し合って陰鬱な場面を描いている。

### 13.6 逸脱

文学は創造活動であり、作家は種々の人物・場面を描くのに社会全体を認識した上で個性的な表現を生み出す。具体的には、言語の選択が個性的、創造的であって基準、あるいは選択制限規則を無視することを行う。逸脱はこのような文学の言語を分析し、解明する一つの視点と言える。逸脱の程度は基準に最も近く、常套的で、あらゆる分野の英語に共通する現象が最も低いと言える。また一般性の低い、したがってあまりなじみのない分野（例えば、科学の専門分野）の英語に現われる独特の表現は逸脱性が高いと言える。心理的には文の構成要素相互間の予測性（例えば、主語と述語の順序あるいは連語における）を破る場合、その破る程度において逸脱性が高い。逸脱は、語彙・文法・音韻論・意味論・方言において現れる。

(文法的逸脱の例)

Fog everywhere. Fog up the river, where it flows among green aits and meadows; fog down the river, where it rolls defiled among the tiers of shipping, and the waterside pollutions of a great (and dirty) city. Fog on the Essex marches, fog on the Kentish heights. (Dickens, *Bleak House*)

ここでは主語＋動詞という文を形成する場合の規則を無視した形で動詞を省略した不完全な文になっている。

#### 【参考文献】

- 池田拓朗 (1992). 『英語文体論』, 研究社出版.
- 伊藤弘之・隈元貞広 (1982). 『英語学概論』, 篠崎書林.
- 豊田昌倫, 堀正広, 今林修編 (2017). 『英語のスタイル : 教えるための文体論入門』, 研究社出版.
- 東田千秋 (1959). 『文体論 : 英国近代作家の文体』, 研究社出版.
- 山本忠雄 (1938). 『文体論研究 : スティリスティック』, 三省堂.
- Crystal, David and Derek Davy *Investigating English Style*, (London: Longman, 1974).
- Enkvist, Nils Erik *Linguistic Stylistics* (4.25 avg rating, 4 ratings, 0 reviews, published 1973).

英語学概論

2018年2月28日 初版発行

著者 上利 学・小西 弘信

発行所 広島文教女子大学

〒731-0295

広島県広島市安佐北区可部東1-2-1

TEL 082-814-3191